

---

# 心の裏側と素肌の境界線を越える為に

dig

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心の裏側と素肌の境界線を越える為に

### 【Nコード】

N0056J

### 【作者名】

dig

### 【あらすじ】

心を奪われる。

それが、恋なら・・・冷静はいられない。

なぜなら、それが恋するということだから。

そして、どんなに傷付いても、癒せるのもまた・・・恋しかない。

だから、どんなにボロボロになっても、誰かを愛した方がいい。

いや…誰かじゃない。

君だから、僕はまた…愛せたんだ。

君だから。

## 過去の苦しみ

「あたし…好きな人ができたの」

泣きながらの電話からの言葉…。

その言葉を、何度…聞いたことだろう。

その癖…。

「あたしが…どれくらい好きか…わかってない」

その言葉も何度も…聞いた。

年上だった…初めての相手だった。

僕を嫉妬させる為に言ってるのかと、最初は思ったけど…。

違った。

今度の相手は、彼女の亡くなった彼氏に似ていた。

彼女の家に遊びに行った時…まるで、僕を拒むように…あった何枚もの写真。

「だから…別れて…」

彼女の言葉を、最初は拒んだけど…僕は、最後は…受け入れた。

もう…その男と、二人きりで会っていたし、

写真を思い出し…僕は身を引いた。

だけど…その数日後、

彼女からの電話。

「別れたから…冷たくするの？」

また僕らは会った。

そのまま二日間…彼女の家に泊まった。

その時も、彼女に男から電話はあった。

少し離れた所で、楽しそうに笑う彼女…いや、もう彼女じゃないか…。

嫉妬と遣る瀬なさで…ぼろぼろになった僕は、

彼女と離れる決意をした。

完全に離れるまで、2ヶ月はかかったけど…。

別れた後…彼女の友人からきいた。

彼女は、男性依存性なのだ。

本当は、死んだ彼氏の前に、旦那がいたのだ。

旦那の暴力のせいで、別れたが…子供もいるらしい。

普段は、実家に預けながら、彼女は働いていたのだ。

その事実には愕然とした。

高校生になったばかりの僕と、年上の彼女…。

世界は、あまりにも違った。

彼女はよく言っていた。

「たっちゃん…本当は、もっと若くて…綺麗な女の子と付き合った方がいい…」

「たっちゃんといると…しんどいよ…つらい…」

また数ヶ月後…。

あれから、彼女は…彼氏に似ていた男とも別れ、  
それから、二人目の男と結婚すると…知らされた。

僕は悩んだ。

僕の何が…いけなかったのか。

彼女の望むことは、すべてやってあげた。

そりゃあ…学生だから、できることはしれているが…

彼女は僕のすべてだった。

初めての人だから…。

あれから、一年が過ぎた。

彼女と出会った時…15歳の終わり頃だった僕は、  
16歳もあと少しで終わる。

彼女が…もう結婚したのかは、知らない。

彼女の友人とも、会わなくなったから…。

だけど、まだ…心の傷だけが癒えてない。

そんな日々に…僕はあの人と出会った。



## あれから

「だから、女ってやつは、全身で受け入れるから、男より、愛情が深いんだって！」

何かの情報誌を持って、話し続ける小林正利に、俺は軽くそっぽを向きながら、机に頬杖をついていた。

（つまり：男の愛情は、薄いと言うのかよ）

心の中で、毒づいた俺の脳裏に、別れた彼女の顔が浮かぶ。

思わず、顔をしかめた俺を訝しげに、正利は見た。

「きいているのか？ 太一」

正利の質問に答えない俺に、正利は肩をすくめた。

「いいか！ これは、重要なんだぞ！ いつか、俺達に彼女ができてだろ。その時が来る」

うだうだ話だした正利の話を、俺はもうきいてなかった。

比較的学校ではおとなしく：女の子にも、昔よく間違えられた俺は：奥手で、未だに童貞だと思われていた。

去年は、学校を休みがちで：体が弱いとも思われていたけど：実際は、彼女に呼ばれ、ずっとそばにいたのだ。

彼女と別れてから、休んだことはないが、

あまりにも去年の印象が強すぎたのか…今だに、体育の授業は優遇されていた。

女の子のように、目が大きく…かわいい（らしい）俺は、クラスの女からは、守ってあげたい存在らしかった。

「お前は…女に人気があるからと言って…」

童貞で、耳年増とある正利から、何をきかされても…勉強になることはない。

逆に教えてあげたくなるときもあつたが…彼女のことを話すみたいで、いやだった。

最後に彼女の話聞いたのは…もう大分前だ。

見知らぬ男と、歩いていたと…。

俺の中で、悔しさでいっぱいになった。

見返してやりたかった。

自分も、女を連れて…彼女に見せ付けてやりたかった。

それも、彼女以上の綺麗な女と…。

人は無意識に…綺麗なものに目が行くけど…、

綺麗と思うけど、

あまりにも高嶺の花の場合…無意識に、意識しないようにしてる場合がある。

好きになっても…完全に無理な場合…。

俺にとって、彼女がそうだった。

同じクラスにいたのに、俺は長いこと気付かずにいた。

片桐麻衣。

俺の席の後ろ…対角線上にいる彼女は、確か…二年からの転校生だった。

あまりに、整った横顔や流れるような姿勢の美しさ。

（あんな…女だったら…）

彼女は悔しがってくれるだろうか。

あまりにも、綺麗で…あまりにも、美しい過ぎる…女なんて、  
普段なら気にはしない。

分をわきまえているというか…臆病なんだろう。

そんな俺の一步は、不純だった。

だけど…俺は、自分でも気付いていかなかったけど…。

本当は…一目惚れをしていたのだ。

普段なら、近づかない花に、俺は近づくことになる。

それが、どんな結果を生むかなんて…考えもせずに。

「顔とか…容姿で、好きになるなんて…不純だよ」

俺から少し離れた席に座っていた多岐総司が、呟くように言った。

なぜか…届いたその声に反応して、振り向くと、

総司が俺の顔を睨んだ。

その瞳の純粹さに、俺は息を飲んだ。

「おいおい：総司。最初は、顔だろ？」

2人の間にいた正利は、総司の机に近付くと、手を置いて、顔を近づけた。

「俺達：青少年が、最初から：顔じゃなくて、心なんだああ！……みたいな綺麗事は、負け犬の遠吠えみたいで、駄目だろ？」

これまた童顔で、地毛が茶髪ぽい総司は、椅子を叩いて、いきなり：立ち上がると、

正利ではなく、俺を睨みつけ、

「また：傷ついても知らないからね！」

と言うと、教室から走って出ていった。

「何だよ：あいつは：」

正利が、首を傾げる。

「チッ」

少し間を開けてから、俺は総司の後を追うように、席を立ち、教室を出た。

「おい！太一？」

正利の声を無視して、俺は総司が向かった場所へ走った。

場所は、わかっていた。

階段を上り切った…一番上。つまり、屋上だ。

少し重い鉄の扉を開けると、日差しの強い青空の真下に、俺は飛び込んだ。

目を細めながら、俺は総司を探した。

いた。

扉から一番離れた手摺にもたれ、総司はそこからグラウンドを見下ろしていた。

「総司…」

俺は、ゆっくりと総司に向けて近づいた。

「見えたのかよ！」

俺は、総司の背中に声をかけた。

「それとも…感じたのかよ？」

総司はこちらを見ずに、首だけを横に振った。

「だったら…なぜ…あんなことを言った…」

俺は一メートルくらい開けて、総司の後ろで足を止めた。

俺が、元カノとのことで、秘密があるように……

総司にも秘密があった。

それは、女とかではなく…もっと信じられないことだった。

感受性の高い総司は…その人の持つ心の闇の深さがわかるのだ。

いや、しかし…その闇の要因までは知ることは、できないらしい。

「あの子は…わからないんだろ？ だったら…いいじゃ」

俺の言葉を遮るように、総司は振り向き、また俺を睨んだ。

「僕が言いたいのは、太一の気持ちだよ！」

「俺の……？」

総司は頷き、睨み付けながら言った。

「太一の考えじゃ……また不幸になるだけだ！恋愛って、もっと真剣で、誠実なものだよ」

総司の言葉は、俺の内面を抉った。

だけど、繊細な内側を分厚い嘘と見栄で固めた俺は、そんな動揺を総司に見せなかった。

「俺はいつでも、誠実だよ……」

なぜか……最後はトーンが下がった。

「嘘つき！」

総司は、俺の横を通り過ぎて行った。

顔も見たくないからか、目を瞑りながら。

音を立てて閉まった扉に振り返ることなく、

俺は空を見上げた。

深呼吸をしようとしたけど、逆に呼吸困難になってしまった。



喉を押さえ、何とか呼吸を整えると、

俺は笑った。

「情けない…」

未だに…彼女に捨てられた心が傷んでいることを…1人になると痛感した。

「ったく！」

何かわからず…（多分、自分自身に）苛立ちながら、毒づいた。

「ああ…」

俺は思わず、ズボンの後ろポケットから、煙草を取り出した。

これは、彼女のものだった。

いつも終わった後、虚ろな目で虚空を見つめながら、煙草をふかす彼女を見て、

俺はそんな時…何を考えているのか知りたくて、吸ってみた。

初めての煙草は、とても苦くって…こんなのを、平気に吸える彼女が信じられなかった。

だから、俺はこう…思った。

彼女の心は、俺のそばにはなかったんだと。

「くそ！」

握り潰して、棄ててしまいそうになるが…

いずれ、この味がわかる時、あの時の彼女の気持ちができるかもしれないと思ってしまうと、棄てられない。

だけど…持っていたても、未練があるみたいで、いやだけど。

（というより…未練があるんだろうな）

煙草を握りしめながら、ため息をついた。

「何やってんのよ」

突然後ろから、声をかけられて、俺は飛び上がった。

「うん？」

俺の後ろから、顔を覗かした女は、俺の手にある煙草に気づいた。

「た、煙草！おまえ何、やってんのよ！」

手を伸ばし、俺の手から引つたくと、

屋上のフェイスの向こうに投げた。

「あ！」

俺はこうを描いて、下に落ちていく煙草を目で追った。

これは、これで…問題になるだろ。

事実、中庭の通ridorの真ん中に堂々と落ちていた煙草は、問題になった。

「まったく！煙草なんて吸ってたら…」

俺から煙草を奪った女は、俺を指差し、

「丈夫な赤ちゃんを産めないぜ」

と言ったが、

俺は肩をすくめ、

「産む気ないし…むしろ、産めないし」

女に背を向けて歩き出そうとした。

女ははっとして、

「違った！う、う、う、産ませられないぞ！」

と自分で言ってから、顔を赤くした。

「馬鹿か…」

俺は振り向き、呆れたように女を見た。

「ば、馬鹿ってなんだ！」

女はムキになり、

「煙草を吸ってるやつが、馬鹿だろ！」

さらに顔を真っ赤にする女に、

俺は頭をかくと、

「吸わないよ」

と言が残して、屋上から消えた。

「太一！」

後ろから、女の叫ぶ声がしたが、俺は足を止めることはなかった。

「太一！」

俺の名を連呼する女の名は、橘美佳。

幼なじみと言うか：腐れ縁である

「大体：お前に言われたくないっていうの」

お前は階段を降りながら、毒づいた。

美佳の見た目は、金髪にショートカット：異様に短いスカートは、

完全に校則違反である。

パンクバンドのドラムをやっていたが、

最近メンバーと揉めて、バンドは解散していた。

いや、他のメンバーは新しいバンドを組んでいた。

つまり、追い出されたのだ。

「まったくよお」

美佳は頭をかくと、ドアに向かって走り出した。

力任せに開けると、下に向かって叫んだ。

「太一！おれと音楽やるって、約束しただろが！どうなってるだ！」

後ろから聞こえてきた声に、俺は足を止めた。

「そうだった…」

すっかり…忘れていた。

「太一！」

俺は慌てて…階段を駆け降りた。

**どうしても、壊れたい心**

「別れてよ」

口癖のようになっていた彼女の電話から、漏れる声。

最初は、寂しさの裏返しと思っていたから、

「いやだよ」

と軽くこたえていた。

そんなやり取りが、数ヶ月続いていたから、

いつか別れるんだろうな…と心の隅では思っていた。

別れてが口癖のカップルなんて、続く訳がない。

だけど、

その別れてが、

俺以外の男と付き合う為とわかっていたなら…、

いやという意味も違ってくる。

だけど…

そんないやを一週間くらい言い続けた後、

俺は…

「いいよと言った…」

理由は、簡単だった。

その男は、彼女と付き合うとかのレベルではなく、

婚姻届けを持ってきたのだ。

「たっちゃんじゃあ…あたしと結婚できない」

そりゃあゝそうだ。

俺はまだ…未成年だ。

だから、俺は…頷いた。



「女って…すぐ結婚したがるのかな？」

そんなことを呟いてしまったのは、

美佳の前だった。

「え？」

驚く美佳に、俺は首を横に振った。

「何でもない」

美佳と俺…総司の三人は、いっしょの高校を受けるからと、いっしょによく勉強をしていた。

高校に入っても、その習慣は変わらなかった。

学校の図書室で、呟いた俺の一言。

驚く美佳の表情を、俺は憶えていた。

「その言えば…あの頃のあいつは、金髪でなかったな」

俺は廊下を歩きながら、首を捻った。

教室に入ると、正利が欠伸をしていた。

総司も、自分の席にいた。

俺は軽いため息をつくとき、席に着いた。

なぜだろ？

今日はよく…過去を思い出す。

「いいよ」

完全に別れたはずなのに、

それからしばらく2人は離れなかった。

会うことは会っていた。

彼女がもう…他の男と会っているのが、わかっていたのに…。

女々しいと思うから、離れようとするが、

彼女が許さなかった。

帰り…自然ではなく、無理矢理に近いキスをかわしていると、俺は動けなくなった。

（もう…結婚したのだろうか）

キスをしながら、ぼんやりとそういうことを考えていた。

「もう…来ないで」

と言われたのは、いつだろうか？

理由は、簡単だった。

彼女の家に、男が住むようになったのだ。

俺の恋は、完全に終わった。

振り回され…ボロボロになった恋。

いつまでも、そんなことを引きずっては駄目だ。

そう何度も思い、

何度も離れ、

何度も掴まれた。

まるで、ゴムのような俺を、

突然離したのは、彼女である。

伸びきっていたゴムが、千切るのは簡単だった。

未練や憎しみではない。

今残っているのは…

そう…

ただ千切た心だ。

千切た心が、まだ修復されていない。

最初、別れた時はダメージはなかった。

最後に、彼女：だった人に会ったのは、

その人が勤める店の近くだった。

風邪気味とメールが来たから、心配になって様子を見に行った。

自転車をとばして。

店から出てくるその人に、

大丈夫という前に、俺が声をかける前に、

その人は烈火の如く、怒った。

「どうして来たの！」

どうやら、その人の男が近くで、待っているようだった。

とぼとぼと自転車を押しての帰り道、

ごめんとメールを打っても、返事は来なかった。

それから、1ヶ月後、

メールが来た。

こんな内容だ。

（あたしの誕生日：来てくれないよね）

なんて：勝手な女だと思った。

多分、あの時の男とは別れたのだろう。

少し考えた後、

俺は誕生日プレゼントだけを、彼女に送った。

返事はなかったけど、

その1ヶ月後の俺の誕生日に、

服が送られた来た。

その服に、

俺は袖を通したことはない。

少し話はもとに戻る。

彼女だった人に怒られて、とぼとぼと帰る道の途中、

俺は…閉まりかけた商店街で立ち止まった。

そこから、流れる音楽に心を奪われてしまったのだ。

その時の曲名を知るのは、大分先のことだけど…。

アル・クーパーのジョリー。

クインシー・ジョーンズの娘との悲哀を歌ったと言われる…この曲を聴いた時、

無意識に、俺の瞳から涙が流れた。

そして、いつのまにか…自転車に飛び乗り、こぎだしていたのだ。

まったく興味がなかった音楽に、俺は動かされたのだ。

彼女の店から、俺の家までは駅でいうと、

五つくらいあった。

途中、何度か：坂を越えないといけなかった。

最後の心臓破りの坂を上りきった時、

音楽で、突き動かされた俺のガソリンは切れた。

「何してるの？」

自転車に股がりながら、激しく息をする俺の横に、

金髪になる前の美佳が不思議にそんな顔をして、立っていた。

そうだ。

その時…、

俺は美佳に、音楽の素晴らしさを語ったんだ。

一曲しか聴いてないのに…。



当時ピアノを習っていた美佳に、

無知にも音楽の良さを語ったのだ。

今思えば、

虚しさや悲しさを、たった一瞬の感動で、

誤魔化していたんだろう。

あまりにも、必死な誤魔化は、

美佳の心を動かしてしまった。

美佳はピアノを辞め、ドラマーになったのだから。

## 接近した距離よりも、戸惑う気持ち

「まあ…だからと言って、やるかどうか」

俺は教室に戻ると、真っ直ぐに自分の席に向かうはずだった。

なのに、俺の足は止まった。

自然ととらえた目が、そこから動くのを拒否したからだ。

目の前に片桐がいた。

(畜生)

俺は心の中で、毒づいた。

これじゃ…あまりにも露骨だ。

休み時間もどこにも行かずに、ただ教室で、本を読んで過ごす片桐の美しさは、

どこか近寄り難く…

遠くから眺めるのがあっているように感じた。

それは、クラスの女子もそうなのか…

話しくそうだった。

というよりも、

片桐のそばに近寄ると、

クラスの女子なんて、ガキに見えるのだ。

冷たいとかではなく、やたら落ち着き、大人の雰囲気を出して  
いた。

だからと言って、無口という訳でなく、

話しかけると結構気さくにこたえてくれる。

頭がいいので、授業でわからないところをきくと、

嫌な顔をせずに、教えてくれる。

つまり…別格なのだ。

そんな別格の片桐をしばらく見つめてしまった…俺。

さすがに、片桐も妙な視線を感じたのか…顔を上げた。

俺と目が合う。

「あっ…よお」

片手をあげて、気さくに挨拶してみた。

少し驚いたような顔を、俺に向けた後、

片桐は視線を本に戻した。

「…」

あまりにあっさりと、視線を戻されたから、

俺は結構…ショックを受けてしまった。

(そりゃあゝ笑顔とかは、期待してないけどさ)

俺は席に戻るまでの途中、ずっと片桐の顔を見てしまった。

席についてしまうと、片桐の席は後ろだから、

振り返って見つめる訳にはいかない。

顔を伏せた為に、強調される長い睫毛。

その奥にある瞳の色に気付いた時、

俺は…片桐に背を向けて座りながら、

首を捻った。

（何だ…この気持ち）

俺の胸に、切なく…やるせなく…そして、

深い悲しみが浮かんだ。

（どうしてだ？）

頭は綺麗と認識しているのに、

胸の奥は深い悲しみを覆われていた。

自分の体なのに、その理由がわからなかった。

それを知るには、俺には経験が足りなかった。

そうだと気づく経験さえも。

授業中も、片桐のことが気になっていた。

（さっきの瞳は…）

どこかで見たような気がした。

なのに…わからない。

少しもどかしさを感じてしまうが、わからないものは、わからなかった。

心の中で、頭を抱えてしまった。

そんな俺の様子を、斜め前に座る美佳が見ていることに、まったく気づかなかった。

規則正しく鳴り響くチャイムを聞きながら、

俺は立ち上がり、

後ろに向かって振り返ろうとした。

「太一！」

突然、前から声をかけられた。

反射的に振り向くと、美佳がいた。

「たまには…いっしょに帰らないか？」

「え」

少し照れたように上目遣いで言う美佳の様子に、驚いてしまい…一瞬、動きが止まってしまった。

「帰ろうぜ」

念押しをする美佳。

「…」

無言になってしまった俺の横を、

片桐が通り過ぎた。

「あっ」

俺の口から、声が出た。

俺を見つめる美佳の横を、通り過ぎる片桐。

その片桐の姿を、目を見開いて見送る俺。

そんな俺の表情に気付き、少し悲しげな目をする片桐。

だけど、片桐の顔など…俺の目には映っていない。

だから、俺は…片桐が視線から離れると、

思わず手を伸ばしながら、声をかけた。

「片桐！」

俺の声に、片桐の足が止まる。

ゆっくりと振り返る片桐と、道を開けるかのように…顔を伏せる美佳。

「何？」

初めて聞いたかのような…透き通った声に、

俺は唾を飲み込んだ。

本当は…、

いっしょに帰ろうと言いたかった。

だけど、

片桐の顔に見つめられた瞬間、

出た言葉は…



「気を付けて、帰れよ」

だった。

俺の言葉に、片桐は少し驚いたような顔をした後、

「ありがとう」

と礼を言っ、前を向いた。

その時、ほんの一瞬だけ、

俺に微笑んだ片桐の顔が、俺の息を止めた。

「た、太一！」

耳元で大声を出され、俺はびくつとして、

再び現実に戻った。

「帰るぞ！」

強引に俺の腕を取った美佳は、怒ったような顔をしながら、教室の外に連れ出した。

そして、キョロキョロと廊下の左右を確認した後、

片桐が歩いていく方と反対側へ、俺の手を引いて歩きだした。

「何だよ」

俺には、美佳の行動の意味が理解できなかった。

「お前って、やつは！」

美佳に腕を取られ、廊下を引きずられるように外に連れ出された俺。  
帰る正門からは、遠ざかっている。

「離せよ！」

俺は、美佳の手を振りほどいた。

「お前が、あんな年増が好きだなんて知らなかったぜ」

美佳は、無理矢理ほどかれた手を見てから、俺を睨むと背を向けた。

「年増？」

俺は…怒ったような様子の美佳の背中に、首を捻った。

「し、知らなかったのか？」

美佳は思わず振り返り、驚いた顔を向けた。

「?」

「へえ」

美佳はいやらしい顔を見ると、また俺に背を向け、

「みんな：口にはしてないけど、有名だよ。本当は、一つ年上だと」

「そうか…」

俺は、頷いた。

片桐の顔を思い出していた。

あの雰囲気は、年上だからか。

でも、それだけではないような気がした。

あの瞳の色。

「だから…」

言葉を続けようと振り返っ美佳は、ショックを受けるよりも考え込む俺を見て：

逆にショックを受けていた。

「だから…」

言葉が続かない。

「うーん」

深く考え込む俺を、美佳は無言になって見つめてしまった。

やがて、美佳は拳を握りしめると、

「だから！あんな年増を！」

大声で叫びだした。

だけど、それ以上は言わせなかった。

俺が手で、美佳の口をふさいだからだ。

「そんなことを言うなよ。何か事情があるんだろうし」

そう言った後、俺は手を離れた。

「年上とか：関係ないし。今は、クラスメイトだしな」

俺は頭をかくと、歩きだした。

「つまらんことを言うなよ」

少し吐き捨てるように言った俺の言い方に、

美佳の瞳に涙が滲んだ。

「お、おれは！」

美佳は離れていく俺の背中に、叫んだ。

「心配してるだけだ！」

俺は足を止めずに、後ろに向けて手だけを振った。

遠ざかっていく俺を、美佳は追いかけることができなかった。

ただ…本当にききたかった言葉だけを呟いた。

「好きなのか…片桐さんのことが…」

だけど、

その言葉が、俺に届くことはなかった。

**壁は、触れる唇の向こうにある**

美佳と離れた後、俺は走り出した。

勿論、片桐を追う為だ。

つまらないことで、時間を使ってしまった。

でも、まだ駅にはついていないはずだ。

走れば、間に合う。

俺は、帰る生徒達を追い越しながら、

片桐の後ろ姿を探した。

自転車通学をしている可能性もあったが、

なぜかそれは考えなかった。

なんだろう…。

片桐には、自転車通学は似合わない。

そう感じていたからだ。

しばらく、走っていると、

俺の目は片桐の背中を見つけた。

なぜだろう。

片桐の後ろ姿は、他の生徒達とはどこか違っていた。

落ち着いているからか。

俺はダッシュし、前を歩く片桐を追い越した。

一応、追い越す時、

俺は確認の為、

横目で片桐の横顔を確認した。

前を見て、凜として歩く片桐の横顔は綺麗だった。

誰よりも。

誰が見ても、美人と言うだろう。

なのに、

俺が心を奪われたのは、

その美しさではなかった。

俺ははっとした。

すれ違った瞬間の瞳の奥にあるもの…。

また…あの瞳だ。

俺は、足を止めることができずに、

片桐を追い越してからも、しばらくは走ってしまった。

駅のすぐそばまで、全力で走った俺は、

急いで電車に乗りたいただけの生徒に見えただろう。

だけど、俺は足を止め、反転した。



学校の方を睨むように見つめる俺の後ろを、

電車が横切っていった。

息を整えながら、俺の目は：近付いてくる片桐だけを見つめていた。

最初は、その視線に気づかなかった片桐も、

仁王立ちのように立つ俺の存在に気付いた。

と同時に、俺の目が自分を見ていることにも気付いた。

だからといって、片桐は足を止めることはない。

対角線上にいる俺を避けることもない。

ただ自然に、少しだけ横にずれると、

俺のそばを通り過ぎる。

声をかけようとしたが、俺の口から言葉が出ない。

体の自由もきかない。

この瞬間、俺は本当に彼女に惚れてしまったのだろう。

そのことに、その瞬間の俺は気づかない。

ただ…片桐に声をかけなければと、気持ちだけが先走っていた。

片桐が、俺から通り過ぎた…長い数秒後、

やっと体が動いた。

「片桐！」

また呼び捨てにしてしまった。

さっきもそうだが、俺と片桐の間にはクラスメイトという接点だけで、

話したことはない。

普通なら、聞こえなかったフリをして、

そのまま改札を通ってもいいはずなのに…。

片桐は足を止め、俺の方に顔を向けた。

「何？」

少し冷たい言い方だけで、そこに刺はなかった。

だから、俺の足は動いた。

片桐に近づきながら、笑顔を作り、

「いっしょに帰らないか？」

軽く言ってしまった。

さっきが、気をつけて帰れで、

今はいっしょに帰ろうか…。

捻りがない。

だけど、それしか言えなかった。

片桐は目を丸くして、近付いてくる俺を見た。

「いっしょに帰らないか？」

もう一度、言ってみた。

軽く言ってみたつもりだったけど、顔が強張っていることに気付いていた。

表情を作る余裕がなかったのだ。

でも、真っ直ぐな気持ちだけを伝えたかった。

そんな俺に、片桐は苦笑した。

「積極的ね」

「え！あっ…え…」

笑われたことが予想外で、しどろもどろになってしまった。

そんな俺の様子に、今度はふきだした。

「ええっと…」

俺は、何も言えなくなってしまった。

そんな俺に、赤い定期入れから定期券を抜くと、

片桐はそれを示し、

「わかったわ。いっしょに帰りましょう」

にこつと微笑んだ。

「…ありがとう」

あまりにスムーズな展開に、俺は逆に照れてしまった。

片桐は俺を見つめながら、

「ところで…線はどっちなの？あたしは八瀬方面だけど…」

定期を通した。

「お、俺は…」

ここで、定期を通そうとして…動きが止まった。

定期が切れていたのだ。

明日買う予定で、

今日は自転車で、時間をかけてきたことに…。

改札の向こうで待つ片桐に、

俺は情けない顔を向けた。

別に自転車を置いて、電車で帰ってもいいのだけど…、

今日は、持ち合わせもなかったのだ。

ほぼ無一文の俺は、頭をかきながら、

片桐に顔を向け、

「ご、ごめん…。いっしょに帰るのは、明日で」

「教室に忘れものしてさ。あはは…」

愛想笑いをしながら、後ろ足で下がると、

「ごめん！」

そのまま…逃げるように、改札から離れた。

もう…片桐の顔は見れない。

情けない自分を悔やみながらも、俺は全力で走った。

ない忘れ物を、取りに帰る為に。

正門に着くと、中から自転車をこぐ美佳が出てくるところだった。

美佳は、俺に向かって舌をだした。

「？」

眉を寄せる俺の横を通りすぎると、駅とは反対側の方へ曲がっていった。

「な、何だよ…」

自転車置き場についた俺は、自分の自転車のサドルに貼られた紙に気付いた。

その紙には、馬鹿と走り書きで書かれていた。

貼り紙を外すと、くしゃくしゃに丸めて捨てた。

「ったく！」

毒づきながら、サドルに股がると、俺は自転車をこぎだした。

自分自身の情けなさを噛み締めながら、

一時間以上はかかる道程を走り出した。

「こんなときに、定期が切れているなんて」

駅と反対側にある国道にそって、帰らなければならない。

正門を出ると、制服の内ポケットに入っている携帯を取りだし、時間を確認した。

「こんな時間か…」

俺はため息をついた。

駅までの往復や美佳とのやり取りで、時間を使ってしまった。

いつも帰る時間より、二十分遅い。

自転車通学の時は、早く帰らなければならなかったのに…。

「どうしようかな」

俺は自転車を走らせながら、悩んでいた。

去年までは、雨の日以外は自転車通学していた。

時間はかかったけど、お金はかからない。

それに…

国道のそばに、彼女だった人の働く店があったからだ。



その店を避け、さらに心臓破りの坂を避ける道もあったが、国道を外れ、さらに二十分くらい遠回りをすることになる。行きは坂も下りだし、店もやっていない。

二十分前なら、まだ準備中だから、会うことはない。

遠回りをすることも考えたが、国道を外れたら…ほとんど街灯がない。

真っ暗な道をひたすら走るだけである。

それに…。

これが一番だが、

なんか…逃げてる気がして嫌だった。

だけど…。

「行くしかないだろ！」

俺は、自転車を立ちこぎしだした。

店の前を通るのは、一瞬である。

それに、反対側の歩道を走れば、気づかれない。

そう…気づかれない。

なのに、俺は…。

店の前を通った。

開店したばかりなのに、店の中に客はいた。

客が座るカウンターの向こうに、彼女だった人はいた。

一瞬だったけど、俺の目は確認していた。

唇の色が違う。

一瞬なのに、俺は…俺が知る彼女との違いに気付いた。

派手な色だから、彼女の顔の中で浮いていた。

（結婚したという…男の趣味か…）

前の方が、似合っていたのに。

だからと言って、変えさせる権利はない。

「結婚しても…働かせているんだ」

もういないかとも思っていたが、

ガラス越しの店内で見つけることができた。

「そうか…」

一つ目の軽い坂を登りきった時、

なんだろう…なんというか…

心がすっきりしていることに気付いた。

何だかんだいっても、元気ならそれでいい。

あんなに近かった唇も、今は別の色になっていた。

そんなことを考えるよりも、俺の目は坂から見える…鉄橋を見ていた。

その上を、電車が走っていた。

「片桐…」

俺の口から、言葉がこぼれた。

勿論…今の電車には乗っていない。

片桐を乗せた電車は、大分前に渡っているだろう。

なのに、片桐が帰る方向と同じ電車を見ると、

胸が切なくなった。

## 揺れるビート

恋愛を癒すには、恋愛しかないのだろうか？

そんなことを、無意識の奥で俺が考えている頃。

家に帰った美佳は、二階にある自分の部屋でドラムを叩いていた。

部屋のほとんどを占領するドラムセットの真ん中で、激しくビートを刻んでいた。

正確にリズムを刻んでいたのに、

途中でバラバラになり、むちゃくちゃになった。

まるで憂さ晴らしのような音に、自分自身の苛立ちを感じた美佳は、スティックを置いた。

まだ反響するシンバルを止めることなく、甲高い音を鼓膜の奥で聴いていた。

「やっぱり…やらないのかな…」

美佳はドラムセットから抜け出すと、部屋の隅に追いやられたベッドに倒れ込んだ。

ピアノとドラム…。

ピアノができたなら、何でもできるし、

需要の少ないドラムを叩けるようになっていたら、

太一がバンドをやりたいと思った時、どんな場合でも対応できる。

そんな状態を一年近く保っているのに、

肝心の太一がやろうと言わない。

それどころ…太一の心は、自分に向いていないかもしれない。

「馬鹿みたい…」

ドラムセットを見つめ、美佳は呟いた。

意気込んで買ったドラムセットも、虚しく見えてきた。

「買うんじゃないかった…」

ぽつりと呟いた時、

美佳の携帯が鳴った。

「…で？お前は、片桐が好きなのか？」

次日、登校してきた俺の姿を見つけると、

正利は俺の腕を取り、屋上まで連れてきた。

屋上のドアを閉まると、振りほどくように俺の手を離した。

「な、何だよ」

突然連れて来られて訳がわからない俺に、言ったのが、上の言葉だった。

「好きなのかときいてるんだよ」

少し苛立つように…そして、呆れながら言う正利の真意を、俺は理解できなかった。

だから、一応素直にこたえた。

「ああ…」

頷く俺を見て、正利は頭を抱えた。

「やっぱり…そうか…」

正利は俺から離れ、屋上のフェンス越しに登校してくる生徒達を見下ろした。

そして、ため息とともに、呟くように言った。

「やめておけ…」

「え？」

聞こえなかったので、俺が聞き返すと、

正利はフェンスの網に指を入れ、握りしめた。

「ったくよ！」

フェンスを揺らすと指を離し、俺に振り向いた。

「言いたいことは、たくさんあるけどよ！まずは、一つ！」

正利はフェンスにもたれ、

「らしくないぜ。昨日、駅前で、片桐に声をかけただろう。普段は、奥手のお前がさ！」

正利は、吐き捨てるように言い、



「今朝来たら、クラスの女にきかれたよ。お前と片桐のことをさ。香川なんか泣いてたぜ！ああ、畜生！羨ましいことだ！」

そこまで言った後、正利はフェンスから離れ、俺の目を見つめ、

「悔しいけど：お前は、モテんだよ。だから、片桐はやめておけ」

「はあ？」

正利の言う意味がわからなかった。

俺は顔をしかめ、

「どうしてだよ！どうして、そんなことを言うんだ！」

声を荒げてしまった。

そんな俺を、じっと見つめた後、

正利は頭をかきながら、俺に近づき、

「確かに、片桐は綺麗だよ。それは、認めるよ！だけどな…」

俺の肩に手を置いた。

「綺麗過ぎる」

「は？」

俺はさらに顔をしかめた。

そのどころが、悪い。

まさか…。

それだから、俺とは釣り合わないとも言いたいのか。

俺は食って掛からうとしたが、肩をぎゅっと掴む…正利の力に、なぜか反論できなくなった。

「太一…」

正利の口調が、優しくなった。

「な、なんだよ」

予想外の正利の変化に、俺は怒れなくなってしまった。

「悪いことはいわない」

正利は初めて、視線を外した。

掴む手の力だけが、強い。

「片桐の綺麗さは…高校生の綺麗さじゃ…ない。それに、あの美しさは」

正利は目を瞑った。

「正利？」

俺は、正利の様子がおかしいことに気付いた。

腕が震えていた。

「太一……」

顔を伏せだした正利は、絞り出すように、

言葉を吐き出した。

「俺の姉貴に似ている」

「え」

正利の言葉に、俺は啞然となった。

「死ぬ前の……姉貴に似ているんだ」

正利の姉貴は、自殺していた。

正利に似ず……綺麗な姉貴だったらしい。

しかし、その美しさが災いし、

彼女は自殺した。

男には人気があったが、女には嫉妬されたらしい。

その姉貴が、自殺する前の数日は、

弟の正利が見ても、美しいかったらしい。

ゾクツとする程に。

それは、俺が正利と出会う前の話だ。

女の美しさを語っていた時に、正利が突然話しだしたのだ。

（すべてを捨てて：何もなくなった時：心の荷物だったのかな：それをなくした時の女は、美しいよ：。だけど、そこに未来はないんだ）

そんな話を思い出している俺の肩を叩き、

正利は離れた。

「わかったか？」

少し距離を取った正利は、しばらく俺をじっと見つめてから、おもむろに口を開いた。

「昔のお前の目も…姉貴に似ていたよ」

「え？」

予想外の言葉に、驚く俺にフツと笑いかけると、

「だから…俺と友達になったのかもな」

悲しげな目のまま、俺に背を向けた。

「片桐は、やめておけ…。また、すべてを失うぞ」

そう言って去っていく正利。

「正利…」

俺は正利には、昔のことを話していない。

だけど、何かを感じ取っていたのだろう。

「瞳の色…」

俺は瞼を閉じると、そつと瞳に手を当てた。

自分の色など…気にしていなかった。

俺の色は…片桐に似てたのか。

## 知りたい気持ち

チャイムに急かされ、教室に戻る俺。

席につくまで、視線は自然と片桐に向く。

正利に言われたからといって、あきらめる訳がなかった。

逆に、彼女の目を探ってしまう。

あからさまなその行為は、片桐も気づいてしまう。

席に座るまで、片桐と目が合う。

じっと見つめ合ってしまったことに気付き、

俺は白々しく微笑んだ。

片桐は無視するように、視線を教科書に戻した。

俺はため息をつきながら、席に着いた。

離れている為：彼女の色がわからなかった。

もっと近づきたい。

俺はそう思った。

もっと近くで、瞳を探りたい。

そう願った。

だから、俺は授業が終わると同時に席を立った。

「太一！」

俺の斜め前に座る美佳も立ち上がり、俺に声をかけたけど、

俺の耳には入らなかった。

俺はすぐに、後ろを向き、片桐の席に近づいていった。

次の授業の準備をしていた片桐は、俺がそばに来る前に、席を立った。

そして、逃げるように、席から離れた。



「片桐！」

俺は慌てて、後を追った。

教室を飛び出していく2人を追いかけようとする美佳を、

総司が止めた。

「追わない方がいい」

その言葉に足を止めた美佳は、睨むように総司を見た。

「いやものを見るよ」

総司は珍しく…冷たい口調で言い放った。

目を見開き、総司を顔を見つめる美佳は、

両手を握り締めると、

顔をそらし、走り出した。

「美佳…」

教室を出ていく美佳の後ろ姿を、悲しげに見送る総司。

唇を噛み締め、少し考えた後、席を立とうとした。

「さっきの台詞…自分自身にかえってくるぞ」

驚いた総司が後ろを振り向くと、正利が立っていた。

「こっちが、心配してやっても…向こうが、あきらめない限り…どうしようもない」

正利は、総司の肩に手を置くと、立ち上がるのを阻止した。

「今まで…隠してきた気持ちだろう…。そんなことで、おかしくするな」

総司は顔を上げ、正利を見た。

今にも泣きそうだ。

「答えは、もうすぐ出る」

正利は、総司の肩をぎゅっと握りしめた。

「だけど…どっちも友達だ!」

総司の叫びに、正利は頷き、

「だからこそ…中立でいろ!今は関わるな!もし…2人とも傷ついた時…お前がいなければ、関係を直すことはできない」

「で、でも!」

「今、お前が輪に入ったら…」

正利の腕が、震えていた。

「お前達は、今のままじゃいられなくなるぞ」

「で、でも」

納得はしている。だけど、気持ち止まらない総司に、

正利は冷たい言葉を敢えて、浴びせた。

「それに…お前が行っても、何も変わらない！お前が勝手に、傷つ  
くだけだ」

その言葉に、

総司はただ…項垂れた。

「はあゝ」

廊下を曲がり、音楽室等がある特別校舎へと繋ぐ渡り廊下の途中で、  
片桐はため息をつく、立ち止まった。

俺も止まった。

「どうして…」

振り返ると、片桐はきいた。

「あたしに付きまとうの？」

真っ直ぐに俺の目を射ぬくような片桐の視線に、

思わず…息を飲んだ。

「そ、それは…」

君が好きだから。

とは言わなかった。

俺は、片桐の視線から逃げずに、

「片桐のことが、興味あるから…」

「興味？」

片桐は腕を組んだ。

大人しく、冷静だと思っていた片桐の印象が俺の中で、変わってい

く。

だから、俺は一步前に出た。

「…片桐のことを…知りたい」

「知って…どうするの？」

少し怒ったような雰囲気になった片桐に、俺は戸惑っていた。

明らかに、拒否反応が見える。

だけど、そうだからといって…ここであきらめる訳にはいかない。

俺は知っている。

恋愛とは…ある意味、土足で相手のテリトリーに入ることだと。

最初は誰でも、そうだ。

この壁を越えないと、俺は片桐に近づけない。

例え、その結果傷つこうとも。

「知ったら…」

俺は、片桐にさらに接近した。

だけど、片桐は逃げない。

ただ…俺の目を見ている。

その目に吸い込まれそうになりながらも、俺は言葉を続けた。

「俺は絶対…片桐を、もっと好きになる」

「!？」

俺の口から、好きという言葉聞いた瞬間、

大きく見開いた片桐の目がやがて…ゆっくりと細められた。

その目に、俺は何も言えなくなった。

初めて見る目だった。

俺と哀れむような…獲物を狙うような…

何でもとれそうな異質な目。

だけど、それが気持ち悪いとは感じなかった。

ゾクツとくる程、美しいかった。

唾を飲み込んだ俺に気付き、片桐は笑った。

そして、今度はゆっくりと、俺に近づいてきた。

「あたしを好きになるって…本当に？」

「う、うん…」

なぜだろう…追いかけていたはずの俺が、

逆に追い詰められている。

無意識に、後退ろうとした俺は…動けなくなった。

片桐の両腕が、俺の首に絡まっていたからだ。

吸い付くような肌。

前の彼女とは明らかに、違った。

片桐の顔が、すぐそばにあった。

漂う…心地よい香りは、シャンプーだろうか。

「本当に、あたしを好きになれるの？」

片桐の声が近い。

「も、勿論…」

頷く俺から、少しだけ片桐は目をそらし、

「…みんな…そう言うわ」

小声で呟いた。

「え？」

だから、俺にははっきりとは聞こえなかった。

聞き返したが、片桐は繰り返す言うことはなく、

ただ笑顔を向けた。

そして…。

無言で近付く唇が、俺の思考を止めた。

（上手いな…）

触れる前なのに、俺の片桐の唇に震えていた。

このキスは、初めてではない。



そんなことを考えながら、俺が目をつぶった。

その瞬間。

「太一！」

俺の後ろから、声がした。

その声に、片桐は口付けを止めた。

あと…数ミリで、触れあったのに。

俺が目を開けると、片桐は両腕を外し、

髪をかきあげながら、

ゆっくりと歩き出した。

すれ違う時は、片桐は言った。

「この続きがしたいなら…放課後、ここに来て」

前を見て、俺の方は見ずに、背を伸ばして歩いていく片桐。

俺は振り返り、片桐の後ろ姿を見送った。

「な！」

目を見開く美佳の横を、平然と片桐が通り過ぎていく。

先程叫んだのは、美佳だった。

美佳は、片桐には声をかけることができずに、

後ろ姿をじっと見つめる俺に駆け寄った。

「太一！お、お前！何しようとしてたんだよ」

顔を真っ赤にして怒っている美佳を見ることなく、俺は歩き出した。

「見てたんなら、わかるだろ」

キスを邪魔されたことで、俺は不機嫌になっていた。

そんな俺に気付き、美佳はさらに顔を真っ赤にすると、

横を通り過ぎようとする俺に叫んだ。

「ここは、学校だぜ！」

俺は早足になると、

「わかってる」

苛立ちながらもこたえた。

「ば、馬鹿じゃないのか！お前ら！」

自分から離れていく俺に向かって、美佳は叫んだ。

「頭おかしんじゃないのかよ！」

あまりにもうるさいから、俺は足を止めた。

振り向くと、美佳を指差し、

「おかしいのは、お前の方だろ！変な男言葉を使いやがって！頭もそうだ！」

俺の言葉は、止まらなくなっていた。

だから、言い過ぎてしまった。

「金髪！似合ってねえんだよ！」

そう言い放つと、俺はすぐに前を向き、歩き出した。

俺が言ったことで、どうなるのか：結果を見る気もなかった。

廊下で、崩れ落ちた美佳の泣き声も、

授業を告げるチャイムで聞こえなかった。

ただ…授業が始まって、その日…美佳は、教室に戻って来なかった。

## 愛をあげる

「あちゃ〜。言い過ぎたか」

最後の授業が終わっても、教室に帰って来なかった美佳の席を見て、俺は少し反省した。

だけど、今はそれどころではない。

俺が慌てて、片付けをしていると、片桐が横を通り過ぎていった。

俺の方をちらりとも見ない。

本当に待ち合わせをしているのかと、疑いたくなる。

教室を出ていく片桐を見送っていると、

その横から総司が、こっちに近づいてきた。

「太一」

総司の言いたいことは、わかっている。

俺は席を立つと、

「すまん。急いでるんだ」

総司の横をすり抜けた。

「待てよ」

腕を掴まれようになったが、何とか走って逃げた。

「太一！」

「またな！」

俺は手を振りながら、教室から飛び出た。

「ごめん！構ってる暇がないんだ」

帰りの生徒でごった返す廊下を走りながら、

俺は待ち合わせ場所の渡り廊下に向かった。

さすがに、帰り道から外れている為、人がいない。

渡り廊下の手摺の前に、両手で鞆を持った…片桐がいた。

片桐は近づいてくる俺を気付き、体をこちらに向けた。

俺は駆け寄った。

「本当に待ってたんだ」

俺の言葉に、片桐は苦笑し、

「そんなことで…」

俺に近づくと、腕を絡めてきた。

「女は嘘をつかないわ」

173センチある俺よりも少し低い片桐は、上目遣いで微笑んだ。

その妖しさに、俺はさらに心を奪われていった。

「さあゝ行きましょう」

片桐は絡めた腕で、俺の体を動かした。

「ど、どこにいくの？」

歩き出した方向は、正門ではなかった。

裏門。

駅から遠くなり、静かな住宅地を通ることになる裏門から、帰る生徒は少ない。

俺と片桐は、人通りのない道を歩いていく。

「片桐!？」

2人で歩く間、片桐はあまり話さなかった。

2人で腕を組んで歩く姿は、どう見えるだろうか。

途中、その辺りに住む住民とすれ違ったが、

男だった場合：百パーセント、片桐を見た。

背も高く、スタイルの良くてモデルのような片桐は、目を惹く。

学校の中：以上に。

夕陽がいつのまにか、2人を照らしていた。

その眩しさより、そばにいる片桐の方が、俺には眩しかった。

そんな女と、俺は2人である。

改めて冷静になると、その事実に驚いた。

今さら：緊張してきた。



「神谷くん」

だから、片桐が俺のことを呼んでいるのに気づかなかった。

「神谷くん」

やっと、俺が気づいた時：2人は公園にいた。

結構広い公園だ。

こんなところ知らなかった。

思わず、キョロキョロしてしまう俺の動きを、

片桐は絡めた腕で止めた。

「え！」

そして、心の準備をする間もなく、

片桐は唇を押し付けてきた。

甘いにおいが、鼻腔の中に広がり、

とろけるような感触が口の中に、広がった。

思考が飛ぶような口付け。

俺はしばらく気を失ったように、何も考えられなくなった。

片桐が唇を離しても、俺の唇はまだ震えていた。

だから、俺は気づかなかった。

片桐がじつと…俺の瞳の中を覗いていることに…。

「あなたは…不思議な人ね」

片桐は、優しく微笑んだ。

「え」

緩んだ…優しい笑顔に、俺は少し考える力を取り戻した。

片桐はゆっくりと、俺から離れ、少し項垂れた。

「多分…あなたもあたしは…本当は、こんな強引な人間じゃない。だけど…強引にしよう」

顔を上げると、さらに優しくなり、

「だって…。そうでないと、また無くしそうだから…大切なものを」

「！」

俺は、その時初めて…片桐本人を見たような気がした。

片桐はゆっくりと、俺にまた近づくと、

「あたしは…無くしたものを取り戻せない。だけど…あなたは」  
もう一度、キスをした。

「違う。あなたは、取り戻せるわ」

離れた唇と唇の間に、唾液が糸を張る。

だけど、すぐに糸は切れた。

片桐は俺を見上げ、

「その為に、あたしが必要なら…」

再び俺の首に、手を回した。

「いいの」

また接近する片桐の唇を、今度は待つことなく、

俺からキスをした。

長い口付け。

俺はその間に、心が癒されていくのを感じた。

心が安らいでいく。

そんなキスは初めてだった。

片桐の感触に溺れる俺は、自分のことだけで、相手のことを思いやることができなかった。

もし…その時、目を開けたなら、

片桐の閉じた瞼の横にある涙に気づくことができたのに。

それから…俺は記憶がない。

甘く優しい口付けに包まれて、夢の中を彷徨うような感覚だけが、全身を包んでいた。

意識が現実に戻った時、

俺は見知らぬ部屋にいた。

そこが、片桐の家であると気付いたのは、

隣に裸の片桐がいたから…。

俺は布団の上に、全裸でいた。

体についた自分のではない…においに、初めて俺は、完全に意識を取り戻した。

がばっと起きあがった俺に、隣にいる片桐が声をかけた。

「疲れてたのね…終わったら、すぐに寝ちゃったから」

クスツと、片桐が笑った。

「ええええ！」

俺は立ち上がると、自分の下半身を確認した。

その様子を、おかしそうに眺める片桐。

「心配しないで、つけてなくても大丈夫だから」

「えええええ！」

それは、男の俺でも驚く展開だったのに…片桐は妙に落ち着いていた。

へなへなど、布団の上に崩れ落ちた俺を見ながら、

「やっぱり…初めてじゃなかったんだね」

微笑むと、

「手際がよかった」

俺の頭に手を伸ばすと、俺の頭を撫でた。

突然、お姉さんのように感じた片桐を見つめてしまう。

布団の上で膝を抱えているから、大事なところは見えない。

あまりにもじっと見つめるから、片桐は少し顔を赤らめると、照れたように、

「あ、あたしは…勿論初めてじゃないよ」

咳払いとすると、立ち上がり、

俺に全身を露にした。

贅肉一つない綺麗な体は、宝石のようだった。

思わず見とれていると、

片桐は衝撃的な言葉を発した。

「結婚してたからね」

そして、はにかんだ。

「え？」

思いがけない言葉に驚き、固まっている俺に気付かず、

片桐は言葉が続けた。

自分のお腹の辺りを確認し、

「大きくなる前だから…できなかったし…妊娠線も」

そんな片桐の言葉も、俺には聞こえない。

意識が、飛んでいた。

結婚って…。

おかしいだろ。

いや、おかしくないのか。

女は結婚できるのか。

ということは。

キヨロキヨロと部屋を見回す俺の様子に気付いた片桐は、

「もうとっくに、離婚してるから…この家には、あたししかないわよ」

おかしそうに笑った。

そして、そのまま上から、俺に覆いかぶさった。

「おい！」

俺は、布団に背中から倒れた。

片桐は、俺を抱き締めると…耳元で囁いた。

「誤解しないでね…。離婚後、こうなったのは、あなただけだから」

そして、微笑みながら、顔を離すと、

「この学校に転校してきた時から、気付いてたの…。あなたの痛みを…。あたしに似た痛みを持つてることに」

片桐は起き上がった。

俺に股がる格好になる。

「だけど…あなたは癒せる」

俺を見下ろしながら、微笑んだ。



「片桐…」

「大丈夫」

俺の髪を優しく撫で、

「あたしは…壊れた人形なの。何をしても大丈夫」

上から、俺にキスをした。

「あなたの傷が癒えるまで、いてあげる」

「片桐！」

俺は、片桐を抱いた。

今度は、ちゃんと…意識を保って。

すべての…今までの奥にあるものを吐き出すように、激しく。

その時の俺は、嬉しくて…

ただ夢中で…

片桐がなぜこんなことをしてくれたのか…考えることもしなかった。

壊れた人形。

片桐が口にした言葉の意味を考えなかった。

あの時の俺は、

片桐を感じる喜びだけにとらわれていたから。

片桐が住むアパートは、学校から二駅離れていた。

そこまで、知らずに歩いた事実には驚いた。

「じゃあね。気をつけて」

駅まで送ってくれた片桐に、

「ありがとう」

とお礼を言った。

そして、今朝買った定期券を改札に通そうとして、

俺は動きを止めた。

「片桐」

「何？」

俺は振り返ると、携帯を取り出し、

「番号、教えてくれない」

「・・・」

少し間をあけて、片桐は俺に向って、手を合わせた。

「ごめん！あたし・・・携帯持っていないんだ」

俺は驚き、

「そ、そうなんだ」

「前は持っていたんだけど・・・」

声のトーンが、少し下がった。

「どうして・・・」

口にてってしまったけど、俺はそこで口をつむんだ。

「また・・・誰かを傷つけそうだから・・・」

俯き、呟くように言った片桐の言葉の意味を、

俺はわからなかった。

俺の学校に来る前、

片桐が誰よりも、

輝いていた時期に、

何があったのか。

それを知るのは、少し後になる。

く彼女の過去    **[kiss & Eyes]** どうしてく

別に、目立った存在でもない僕…伊藤翔太にとって、

日常は、あまり変化がなかった。

ただいつも集まる仲間が多くて、12人もいた。

そんなにいると、全員と無茶苦茶仲が良いとは、考えられなかった。

12人でいると、一番端に多い僕と違い…いつも、中心にいたのが、彼女だった。

片桐麻衣。

大きな瞳に、さらっとしたストレートの髪が、印象的だったが、

それより、心に焼き付けているのは、笑顔と笑い声だった。

明るい屈託のない笑顔が、好きだった。

そんな彼女がいきなり、学校をやめることを、告げた。

結婚する為だった。

所謂、できちゃった結婚。

そんなことをするようなイメージではなかったが、

できちゃったことより…16歳で結婚できる。

男と違い…女ができることに驚いた。

その話は、夏前に聞いた。

そして、夏休みが終わると、

麻衣は学校をやめていた。

彼女は、堕ろすことより、産むことを選んだのだ。

そして、彼女がいなくなって、数ヶ月がたった…年末。

クリスマスと忘年会を兼ねたパーティーが開かれた。

11人に減った仲間だったが、

その日だけは、12人に戻っていた。

そんなことを知らなかった僕。

店に入った瞬間、目に飛び込んだ…屈託のない笑顔が、カフェのどんな調度品よりも際立っていた。

予想外の事態に、僕はその場で動けなくなった。

そんな僕に気付き、

「伊藤！さっさと来いよ！今日は、特別ゲストが来てるんだから」

12人の中でも、一番お調子者の鈴木に促されて、

僕は…席に着いた。

なぜか、麻衣の前が空いていた。

「え」

戸惑い…さらに、向こうの席に座ろうとするのを、藤本が止めた。

「駄目！ここに座って！」

「な、何でだよ」

無理矢理、座らされる僕を見て、目の前にいる麻衣が、笑った。

「そんなに嫌？」

「い、いや…」

上目遣いで見てくる麻衣の表情に、僕は視線を外した。

「こいつさ…お前がいなくなってから、さらに元気がないの！」

おどけて、麻衣にそんなことをいう鈴木を、僕は睨んだ。

「こわっ」

鈴木は、視線を外した。

「…ったく…」

怒りが込み上げてくる僕に、

笑みを止めた麻衣が、話しかけてきた。

「久しぶりだね」

麻衣の方を見た僕は、真っ直ぐな彼女の視線に、

また動けなくなった。

あまりの緊張が、僕に大切なことを忘れさせていた。

周りの友達も、それに触れなかったから、気付かなかった。

夏前と変わらない彼女の姿と表情に、

僕は…時が戻ったような感じがしていたから。



時を忘れ、パーティーを楽しんだ。

「誰だ！お酒を頼んだのは！」

普段着だと、僕らは高校生に見えなかった。大学生に見えた。

「いいじゃん！少しくらい」

麻衣が、カシスオレンジを飲んでいた。

「あんた…体は…」

隣にいた千秋が、小声で心配そうにきいた。

それと同時に、僕の携帯が鳴った為、千秋の言葉は、僕には聞こえなかった。

「やばい！」

僕は席を立った。

家に、遅くなると言ってなかった。

慌てて席を立ち、僕は店を出た。

鳴り続ける携帯に出た。

「ごめん……今日は、ご飯いらない……」

電話の向こうで怒る母親に、頭を下げてると、

店のドアを開けて、外に出てきた麻衣と……目が合った。

麻衣は妖しく……僕に微笑み、ゆっくりと近づいてきた。

「本当……ごめん……」

携帯を切った僕の首に、麻衣はゆっくりと、手を回してきた。

予想もしていなかった彼女の行動に、動けなくなった僕に、

麻衣はただ……微笑んだ。

その時、彼女の微笑んだ顔の……瞳の……その奥を理解することが、できたら……

僕は拒んだだろう。

いや、拒むことなんて……できない。

今も、そして未来も……。

唐突に、押し付けられた唇が、

僕のすべての思考を奪った。

その唇の柔らかささえ…随分、後にならないと…思い出せなかった。

「え……」

と、疑問の言葉だけが、僕の口から出た。

「伊藤だったら…いいよ」

彼女は、そう言うと、

ゆっくりと僕の首から、手を離し、

「あたしのメール知ってるよね。今までしてくれたことなんて、ないけど…」

麻衣はずっと微笑みながら、僕を見据え、

一度唇をつむぐと、

彼女は言った。

「本当は…ずっと伊藤のことが、好きだったんだよ」

彼女の言葉…。

言葉の意味を、理解できるはずがなかった。

彼女の言葉…彼女の笑顔だけが、あの時の僕の真実で…すべてだった

た。

彼女が、結婚している事実も頭には、あったけど、

彼女の言葉の表面だけが、すべてだった。

麻衣は髪をかきあげ、笑い、

「け、結婚している女が言うのは、いけないよね」

「そ、そんなことは…」

「でも…」

麻衣は視線を、足下に落としながら、

「もう…離婚するんだ」

麻衣は、ゆっくりと視線を戻し、僕の顔を見た。

「今年中には…」

思いもよらない彼女の言葉に、僕は絶句した。

「こ、ことし………て…」

もう数日しかない。

言葉に詰まる僕に：片桐が微笑んだ時、ほんの少しの影を感じた。  
だけど、離婚という言葉が、僕の想像をこえていた為、頭が回らなかった。

別れるという言葉は、たまに聞いたことはあるけど：離婚なんて：万が一、自分の親か知り合いの親にしか聞くことはないだろうと思っていた。

まさか、友達の口から告げられるなんて……。

「あまり、暗くならないでよ」

麻衣は苦笑し、

「離婚に関しては：納得してるんだから……」

「ああ……」

何て反応していいか：僕にはわからなかった。

言葉を選べずにいると、

二人の間に割って入るように、ドアが開いた。

「麻衣！大丈夫？」

藤本だ。

「酔ったんじゃないの？」

藤本の言葉に、麻衣は手を振り、否定した。

（酔ってたのか…）

その酔ってたという…言葉が、さっきまでの二人の会話を否定した。

（だけど…）

藤本に連れられて片桐が、店の内に入ったのを確認すると、

僕は…ゆつくりと確かだったことだけを、指先で確かめた。

**確かなことと…不確かなことの狭間。**

パーティーは、二時間くらいで終わった。

12人もいれば、その中でも、さらに仲が良い者に別れる。

店の前で、解散のハイタッチを、麻衣主導で行った後、

バラバラに、みんなは別れた。

僕はぼおっと、藤本と戯れ合いながら、帰っていく麻衣の後ろ姿を見送っていた。

「ああ…まったくよ…」

背伸びをしながら、鈴木が僕の隣に立った。

どういうわけか…僕は鈴木と、仲が良い。

「あいつの空元気は…見てて、辛いよな…」

鈴木はため息をついた。

「空元気？」

意味が、わからなかった。

ぼおっと麻衣を見つめる僕の視線の先に、鈴木は気付いていた。

「片桐に決まってるだろう？もしかして、気付かなかったのか？あいつのお腹…」

「え？」

鈴木の言葉に、僕ははっとした。

思わず鈴木を見た。

「普通…大きくなってるだろ」

鈴木は、僕に背を向け、

「詳しくはきけなかったけど……流産したらしいぜ」

歩き出した鈴木に、僕はきいた。

「どうして！」

鈴木は足を止め、少し振り返った。

「だから…知らないって…」

少し睨むように、僕を見た鈴木は、また背を向け、

ゆっくりと歩き出した。



「……女だけで話してのが、少し聞こえたけど……やっぱり、早すぎたんだと。妊娠するのが……さ」

鈴木は、少し小さな声で言うと、手を上げた。

「じゃあな……」

と行きかけて、足を止めた。

「お前の気持ちを知ってるから……言うけど……」

鈴木はまた振り返って、横顔を見せたけど、僕を見ずに、

「今の片桐に近づくな。あいつは、俺達の知ってる片桐じゃない」

僕は何も言えない。

「あいつのこと悪く言う訳じゃないけど……お前が傷つくからな」

それだけ言うと、鈴木は帰っていった。

僕は……鈴木を目で見送った後、また麻衣の方に顔を向けた。

でも、もう見えなくなっていた。

僕はもう一度、唇に触ると、

唇を噛み締めた。

そして、ポケットから携帯を取り出すと、黒い携帯の表面を見つめた後……

携帯を開いた。

そして、躊躇いを断ち切るように、アドレスを探した。

勿論、麻衣のメール番号を。

焦ってしまい、なかなか見つけることができなかった。

数秒後、アドレスを発見した俺は震えながら、シンプルな言葉だけを打った。

今の精一杯な言葉を。

おやすみ

とだけ。

メールを送信した後、すぐに携帯を閉じ、

ズボンのポケットに突っ込み、

その場から走りだした。

何かから逃げるように。

家に帰って…風呂に入り、

湯槽につかり、膝を抱えて、少し鼓動を落ち着かせると、

風呂から出た。

部屋に戻り、ズボンの中から携帯を取出し、開けた。

メールが来ていた。一件だけ。

確認すると、ただの文面だけど、体が震えていた。

(おやすみなさい m ( ) m)

ただそれだけの文字。

それでも、それが麻衣からだと思うと、特別な言葉に感じた。

もう僕の気持ちは、止まらなくなってしまった。

そう止まるわけがない。

僕は、毎日…麻衣とメールをするようになった。

メールの内容は、他愛もないものばかりだった。

好きとか…そんな言葉は、使わなかった。

まだ彼女は、結婚していたし…メールで、言うのは、嫌だった。

メールに少し慣れ始めた頃、麻衣から、いつもと違う文面が来た。

明日、会えないかと。

「明日？」

僕はメール内容を見つめながら、少し考え込んだ。

明日は、大晦日だった。

彼女が言った。

（今年中に、離婚する）

そう今年は、明日で終わりだ。



## 口付けの意味

年末の忙しさも、大晦日になると落ち着いていた。

彼女に会ったのは、年が変わる1時間前だった。

二人が待ち合わせたのは、学校だった。

年末の学校は、冬休みの為、入れないかと思ったけど…正門に、鍵はかかっていなかった。

中に忍び込んだ僕らは、一応…職員室から離れた場所にいた。

パーティーから会ってなかったし、二人きりで会うことも初めてだから、はにかんで照れ臭かった。

けど、

学校内を歩いていると、昔に戻ったような気がしてきた。

麻衣は、真っ暗な校舎を見上げ、

「去年の今頃は…学校をやめてるなんて思わなかったよ」

麻衣は、校舎の空気を吸い込むように、深呼吸した。

二人きり…学校…すべてのシチュエーションが、僕の鼓動を激しく

させていた。

駄目だと思いながらも、僕は麻衣の唇にしか…目がいかない。

「何か…変わるのが、早いね。止まってほしいよね」

麻衣は、僕の視線に気付いていた。

ゆっくりと、僕に近づき、麻衣はあの時と同じように、首に手を回した。

そして、前より速くキスをする、すぐに離れた。

抱き締めようとした僕よりも、彼女が離れる方が速かった。

麻衣は僕の顔を見ずに、視線を下に向けながら、

「この前は、結婚してたけど…昼間に、離婚届けを出したから…今のあたしは、学校にいた頃のあたしと同じ…」

麻衣は、僕を見た。

微笑む麻衣の表情に、僕は初めて気付いた。

彼女の悲しみに。

僕は、一気に浮かれていた気持ち…落ちていくのを、感じていた。

「何か…ずるいねよ…あたし。一年前にしていたら…」

麻衣は、頭を下げた。

そして、顔を上げると、

麻衣の目に、涙が溢れていた。

「伊藤を…好きだったのは、本当。だけど、あたしはあの人を選んだ」

麻衣は、僕から目を離さずに、

「伊藤とあたしは似てるの…不器用なところ…。本当の気持ちを言えないところ…。ここしばらく、やりとりしてたメールからも、わかったわ」

麻衣は苦笑し、

「だから…あたしは、強引な彼と出会い…引っ張られて、ああいうことになったの」

麻衣は、流れ落ちていく涙を拭った。

「あたしは、卑怯なの。あたしは…今でも、こんな風になった自分でも、必要としてくれる人がいると、確認したかったの…」

麻衣は、もう涙を拭うのをやめた。



「あたし……本当のことを、あなたに伝えたいけど……やっぱり面と向かっては……無理みたい……」

麻衣は後ろに、下がり始めた。

「か、片桐？」

追い掛けようとする僕を、片桐は制した。

「近づかないで！あなたの優しさは、知ってるから……これ以上……あなたを巻き込みたくない」

麻衣は拒みながらも、精一杯の笑顔を浮かべ、

「あとでメールするね。あたしの真実を……」

麻衣はそう言うと、僕に背を向け、

校門に向かって走りだした。

追い掛けようとしたが、足が動かなかった。

彼女が、僕を拒んでないのはわかっていたから。

嫌がってるわけでないから。

理由がある。

追い掛けてはいけない。

僕の足がこらえ……僕はそこから動けなくなった。

そして、どれくらいたたただろうか……。

立ちすくむ僕が、やっと足を動かし、ゆっくりと歩きだし……校門をくぐった時、

メールは来た。

学校の前で、メールの内容を見た僕は、走りだした。

すぐに、彼女のもとへ。

DEAR…伊藤翔太様。

あなたとメールをしていたここ数日は、あたしにとって、かけがえのない日々でした。

あたしは、今日離婚しましたけど、実際はもう数ヶ月前から、彼とは別居していました。

あたしが、流産したときから。

生まれるはずだった子供を失い、大きなショックを受けていたあたしが失ったものは、

子供だけではなかったのです。

あたしは、あたしは、

もう子供を産めない体となってしまったのです。

結婚できるとはいえ、十六での出産は、危険だったのです。

子供を失い、子供を産めなくなったあたしを、あの人は…最初は慰めてました。

だけど…女としては、見てくれなくなりました。

子供を産めない女と、これからずっといられないと。

彼もまだ19歳です。あたし達が出会って、まだ一年もたっていない。

子供というつながりがなくなったとき、二人のつながりもなくなったのです。

子供が産めなくなったあたし。

女としての価値がなくなったあたし。

生きていく気力もなくなっていた時、久しぶりにあなたに出会いました。

あなたはなら、あたしを受け入れてくれると。

もう愛されることがなくなったと思っていたあたしを、

あなたなら、愛してくれると。

あたしの思った通り、

あなたはあたしを愛してくれるでしょう。

だけど、

あなたとメールを重ね、気持ちが落ち着いていく内に

自分の身勝手に気付きました。

あたしと同じ歳であるあなたに、

あたしは、足枷をつけようとしているのです。

ただあたしを愛してるくれる。

何があっても、愛してくれるというだけで。

親の勧めで、少し離れたところにある学校に、来年から通うことになりました。

アパートを借り、しばらく独り暮らしをしようと思っています。

その場所はしばらく、みんなにも教えません。

いずれ：落ち着いたら、連絡します。

ありがとうね、伊藤。

ありがとうって、言葉じゃ足りないくらい、ありがとう。

そして、さようなら。

走りながら、僕は彼女に電話をした。

しかし、ちょうど年が変わる前で、いなかのくせに、

携帯は混雑し、通じなかった。

メールも混み合っているからか、送れない。

周りの家から、明けましておめでとの声を聞きながら、

僕はずっと携帯を操作していた。

12時半やつと送れたメールは、宛先不明で返ってきた。

電話は…着信拒否となっていた。

何度もメールと、電話を繰り返したが……

彼女に、つながることはなかった。

僕は、道端で泣き崩れた。

どうして、こうなったのだろうか。

どうして、彼女をちゃんと助けることができなかったのだろうか。  
今、思えば……彼女は、最初から、瞳の奥に、信号を発していた。  
なのに、僕は口付けの感触にとらわれ、気付くことができなかった。  
今さら、気付いても遅いんだよ。

馬鹿野郎。

あれから、時がたった。

麻衣がどうなったのか……わからない。

仲間だったやつらも、知らないようだ。

だけど、たまに携帯をチェックしてしまう。

彼女から、メールがいつか……来るような気がして……。

携帯を開け……確認しようとすると、誰かが携帯を閉めた。

「また…携帯を気にしてる…」

不満げに言う女に、僕は笑いかけた。

あれから、何人かの女と付き合った。

「誰のメールを待ってるの？」

歴代の女は、決まってこうきいてくる。

「誰も待っていないよ」

そう言い…女にキスをしようとすると、

決まって、僕は相手の瞳を一度覗く癖ができた。

「どうしたの？」

「いや…」

僕はキスをした。

あれから、何度目のキスをしているが…彼女のような瞳に出会ったことはない。



そして、キスが終わった後…唇の感触を確かめることもしない。

今なら、彼女のすべてを受けとめられるだろうか……。

答えは、自分の中では、決まっていた。

今も過去も…未来も、イエスだ。

それなのに……メールは、来ない。

## 救い合う行為は愛なのか

電車に乗り込んだ 俺は、そっと…唇に手を触れた。

遠ざかっていく風景から、片桐の住むアパートを探した。

しかし、見つからない。

体に微かに残る…片桐のにおいに、俺は少し安らいでいた。

だけど、

こうなった結果は、愛し合ったからではなかった。

俺は、好きになっていた。

さっきの行為で、さらに好きになるだろう。

でも、片桐は違う。

俺を慰めただけだ。

同じ瞳の色を宿す者として。

だとしたら…。

俺は、窓に映る自分の瞳を見た。

そうだとしたら…

俺は今のままでいいのか。

さっきのように、一方的に慰められて。

いいわけがない。

俺は、唇から手を離した。

前で懲りたはずだ。

一方的に、気持ちをぶつけても、

2人の繋がりは太くならない。

俺は、片桐の為に何ができる。

彼女の救うことはできるのか。

そもそも…彼女の瞳の奥にある翳りは、どこから来た。

離婚したからか…。

それとも…。

電車の窓から流れる景色が、俺の瞳に映る。

だけど、それを脳が認識することはない。

最寄りの駅についた俺は、無意識に駅から降り、いつのまにか改札を通り過ぎていた

「おい！」

考え込んでいる俺の前に、誰かが飛び込んできた。

まるで、通せんぼをするかのように。

やっぱり…俺の脳は、前にいる者を認識しなかった。

だけど、何度も避けようとしても、邪魔をするので、

やっと俺は、通せんぼをする者を軽く睨んだ。

「太一！」

俺の睨みよりも、鋭い声で睨みつけたのは…。

「？」

一瞬、わからなかった。

「太一！何、無視してんだよ！」

顔を近づけて睨む女に、俺ははっとした。

思わず指差しながら、後退った。

「美佳か！」

「そうよ！」

腰に手を当て、怒っている女は…紛れもなく、美佳だった。

「お、お前…どうして」

すぐにわからなかったのには、理由がある。

今日学校で会った時は、金髪だったのに、

一年前の黒髪に戻っていた。

美佳がキッと、俺を睨みながら、

「お前が、言ったんだろが！金髪が似合わないって！」

「あっ」

確かに、そう言った。

忘れていた。

感情に任せて、思わず言ってしまったただけだから。

「まったく！染め直すのに、時間がかかったぜ…じゃない！かかったわ！」

どうやら…口調は直そうとしているらしい。

思いもよらない美佳の行動に、俺は何も言えなくなった。

啞然としている俺を、びしっと指差すと、

「これで、文句はないな」

「う、うん」

有無を言わせない美佳の迫力に、俺は頷いた。

「よし！」

美佳も頷くと、まだたじろいでいる俺の横をすり抜けて、改札に向かう。

自転車通学の為、定期を持っていない美佳は、あらかじめ買っていた切符を改札に差し込んだ。

「あっ！それと」

改札を通りながら、美佳は振り返り、

「ロックはやめないからな！」

そう叫ぶと、プラットホームに向かって、走り出した。

「な、なんなんだ」

美佳の姿が見えなくなった頃、俺は振り返った。

「髪…黒に戻したのか」

俺は頭をかくと、歩き出した。

なんか…調子が狂った。

片桐のことで考え込んでいたのに、

「ったくよお！」

いつもの俺に戻ってしまった。

軽く苛立ちながら、少し早足で、家への道程を歩いていった。

ボタン。

激しく音を立てて、閉めたドアにもたれながら、片桐はため息をついていた。

「どうして…」

自分でもさっきの行動は、信じられなかった。

靴を脱ぎ、部屋に入ると、まだ布団が敷いてあった。

しばし布団を見下ろした後、その上に倒れ込んだ。



「どうして…」

また自分にきいてしまう。

翔太にキスとして、助けを求めたことを後悔しているのに、

またあたしは…キスをしてしまった。

それ以上も…。

この学校に来てから、目立たずに、卒業までやり過ごすつもりだった。

本当はすぐに、働こうと思ったけど、

最終学歴が中学では、働ける場所は限られていたから…高校くらいは出ておこうと思っていた。

だって…

多分…

あたしは一生…

独りだろうから。

親は、片桐の体を心配していたが、

別に1人で生きるには支障はない。

ただ…この歳で、突き付けられた現実が、

これからの幸せを片桐から奪っていたただけだ。

だから…。

同じクラスで、神谷を見た時…。

いえ、

神谷の目を見た時、

片桐は心の中で震えた…。

同じような苦しみを抱えている神谷の目に。

それは、痛みを知る者しかわからなかった。

それに、神谷は…どこか、翔太に似ていた。

ということは、自分にも。

見た目ではない。

性格だ。

なのに、強引に接近してきた神谷に、

片桐はさらなる悲しみを見た。

この人は、何か深い悲しみを振りほどく為に、

あたしに近づいたのだと…。

それに気づいた時、

片桐は心の中で、泣いていた。

強がりながらも。

壊れた人形である…自分を必要とするならば…受け入れようと思っ  
た。

壊れる前からの知り合いだった…翔太にはできないことだった。

穢れてる。

汚れてる。

心のどこかで、自分自身を責める声がした。

「わかってる！」

片桐は布団の上で、うずくまった。

だからといって、

どうすればいい。

壊れた体は戻らない。

あたしは、欠陥品だ。

誰もあたしを、救うことなんかできない。

救ってほしいと願ってもいけない。

あたしは独りで、強くならないといけない。

まだ長い…人生を。

そこから、抜け出すには

死ぬしかない。

…と、何度も思ったが、

片桐は死ぬことを選ばなかった。

いや、選ぶことはない。

浅はかな自分のせいで、

失った命があるのだから。

人はどうすれば…強くなれるのだろう。

痛みや傷や…悲しみを癒せる心があれば…強さと言えるのだろうか。

片桐は知っていた。

それは強さではあるが…そこに、幸せはないと。

なのに…今の自分は。

片桐は寝返りをうった。

穢れたと思いながらも、心のどこかで、温かさを感じていた。

「神谷…太一…か…」

不思議と、太一自身には嫌さを感じなかった。

そう…太一自身には。

もし…2人が、最初から…初めての出会いだったら…。

素直に幸せに感じたのだろうか。

## 終わらない心

激しくビートを刻む。

音が爆発するのではなく、弾むのだ。

聴いている人間の体が、飛び上がりそうになるくらいのスウィング感のあるビートは、

心も弾ませた。

「いいねえ…。彼女」

スタジオ内でドラムを叩く美佳の音を、ブース内で聴いている2人の男。

「拾いものだよ」

興奮気味に話す初老の男に、まだ二十代後半のプロデューサーが頷いた。

「偶然、彼女が叩いていたバントのテープを聴きましてねえ」

人差し指で眼鏡のズレを直すと、プロデューサーは美佳をじっと見つめた。

「今の若い子…いや、日本人のドラムには、あのスウィング感がな

い。これは、天性のものです。努力で、どうなるわけでもない」

プロデューサーはにやりと笑った。

「彼女は：私達がつくる新たな音楽の基盤になりますよ」

ひとしきり叩いた後、ドラムセットの中から抜け出した美佳を、拍手が迎えた。

「素晴らしい！」

スタジオ内に入ってきたプロデューサーは何度も頷きながら、美佳に近付いてくる。

「本当に素晴らしい！」

わざとらしく誉めるプロデューサーも方を、美佳は見た。

「君のドラムが加われれば、私達のプロジェクトは完璧になる」

プロデューサーは拍手しながら、

ちらりと後ろを見た。

いつのまにか、スタジオの外に控えていた女の子達が頷くと、中に入ってきた。

「紹介しよう！君の仲間になるメンバーだ」



美佳は、ちらっとメンバーを見た。

一目で、実力ではなく…見た目で選んだことがわかる。

初老の男もスタジオ内に入ってくると、プロデューサーに耳打ちした。

「金髪の際は、少し悩んだが…今は、いいじゃないか。なかなかの素材だ」

満足げに頷く初老の男。

「さあ！一度、合わせてくれたまえ」

プロデューサーの声に、美佳は無言で、ドラムセットの中に戻った。

（曲は何だ？）

と心の中で思いながら、他のメンバーがセットするのを見つめていた。

（まあ…いいか）

準備が終わったのを確認すると、美佳は叩き始めた。

「素晴らしい！」

知らない曲だったけど、どうやら…このメンバーでのデビュー曲みたいだった。

どこかで聴いたことのある曲調に、

可愛さと、ほんの少し生意気さを強調する歌詞。

あっというまに、曲は終わった。

「完璧だよ！」

音の余韻の中で、まだ興奮しているプロデューサーの横を、美佳はすり抜けた。

「え！」

スタジオを出ていく美佳に気づき、慌ててプロデューサーは追いかけた。

「橘くん！どこへ行くんだい」

美佳は後ろを振り返らず、出口に向かって廊下を進んでいく。

「橘くん！」

プロデューサーの声を無視して。

廊下を歩きながら、美佳は携帯をかけた。

だけど、つながらずに…すぐに留守電になった。

美佳は苛立ちながら、携帯に叫んだ。

「馬鹿太一！いつになったら、あたしをバントやるんだよ！」

そこまで言うと、ブチッと携帯を切った。

「ほんと…」

つながらなかった携帯を見つめ、

「馬鹿なんだから…」

呟くと、

「フン！」

携帯をしまい、早足になった。

「いけね…」

家に着いた俺はベッドの上で、仰向けになりながら、携帯を見つめていた。

「電源切れてる」

ため息をつくとき、携帯をベッドの端に投げた。

「まあ…いいつか。こんな時間にかけてくるやつは、いないし」

昔の彼女は、寂しくなったら…夜中でも電話をかけてきた。

だから、電源を切らすことはしないようにしていた。

ずっと、その癖が抜けていなかったけど、

今は…取り急ぎ、かけてくるやつはいない。

総司や正利がかけてきたとしても、大した用でないだろう。

俺は自分の部屋の天井を見上げ、

「片桐が持っていたらな…」

深くため息をついた。

なんだろう…。

前と違い、

今回は…俺がかけたくて、たまらなかった。

## スウィートソウル

学校に行くまで、ずっとたまらなかった。

気持ちが先走り、すべてが愛しく思えた。

教室にいくと、もう登校していた片桐に走り寄った。

「おはよう！」

満面の笑みの中に、照れる思いを隠し、挨拶した俺を…片桐はちらりと見上げると、広げていた教科書に目を戻し、

「おはよう」

少し素っ気なく返事した。

「？」

俺との温度差を感じ、少し眉を寄せてしまった。

「あ、あのさ。かたぎ」

少し雰囲気を変えようとした俺の肩を後ろから掴み、誰かが強引に振り向かせた。

「太一！」

俺の視界に、なぜか怒っている美佳が現れた。

「ごめん…忙しい」

俺はまた、片桐の方を向こうとしたが、

今度は腕を掴まれた。

「痛い！」

思い切り俺の腕を握り締めながら、美佳は片桐の前から廊下に連れ出した。

「どうして！」

美佳は廊下に出ると、俺の腕を振り離し、

「昨日！携帯に出なかったのよ」

俺を睨み付けた。

「ああ」

俺は腕をさすりながら、昨日の夜のことを思い出していた。

「電源が切れたんだよ。悪かったな」

そう言うと、また教室に戻ろうとする俺の腕を、また掴んだ。

「留守電にも入れたのに…」

顔をふせ、呟くように言う美佳。

「聞いてない」

俺はもう、美佳を見てなかった。

教室内の片桐の方を向いていたから。

「太一は…」

美佳は、腕から手を離した。

「おれのことなんて…どうでもいいんだね」

「え？」

震えるような美佳の口調に、俺は振り返った。

美佳の黒髪が、俯いている顔の表情を隠していたけど、全身が小刻みに震えているのが、わかった。

「中学の時は、優しかったのに…高校に入ったら、おれのことなんて！見向きもしない！」

顔を上げた美佳は、泣いていた。



「!？」

その顔に驚き、思わず動きが止まった俺の顔に、  
美佳の拳が叩き込まれた。

「グーかよ」

首が跳ね返る程のパンチをくらって、俺はふらついた。

「太一の馬鹿！」

捨て台詞を残し、美佳は俺の前から消えた。

「何なんだよ」

思い切り叩き込まれたパンチは、鼻を直撃していた。

鼻血が出ていないか確認していると、

後ろから声がした。

「好かれてるのね」

「え？」

振り返ろうとすると、横を片桐が通り過ぎ、少し前で止まった。

「羨ましい」

片桐の言葉に、俺は驚き…慌てた。

「あ、あいつとは、何も…」

言い訳しようとした俺を、振り向いた片桐がじっと見つめていた。

俺は何も言えなくなり、息を飲み込んだ。

そんな俺に微笑むと、片桐は前を向いた。

「気持ちを素直に、相手にぶつけられる…。あたしにはできないことだから」

ゆっくりと廊下を歩き出す片桐の後ろ姿を、

俺は普通に見送ることしかできなかった。

「…で」

時間は過ぎ、昼休みに突入した。

教科書やノートを片付けていると、俺の前に正利が来た。

「どうなっているんだ？」

近づいた正利のこめかみに、血管が浮かんでいた。

「え？」

俺は、意味がわからない。

首を傾げていると、正利は俺の肩越しに、片桐を見つめた。

「警告したはずだけどな」

正利は顔を離すと、俺の肩に手を乗せ、

「飯、食ったら…屋上な」

それだけ言っていると、教室の入り口で待っている総司と美佳のもとに向かった。

「フン！」

美佳が、俺を見てそっぽを向いた。

今日は、あのままいなくなることではなく、教室に戻ってきたが、

俺と口をきいてくれない。

本当ならば、4人で昼御飯を食べるのだが…、

どうやら俺は外されてらしい。

かといって…。

ちらっと後ろを見たが、片桐は自分の机の上で、弁当を広げていた。

何かを買ってきて、隣で食べる訳にもいかなかった。

クラスメイトの目もある。

「仕方ない！」

俺は席を立ち、学食へと向かった。

そして、学食の中にある売店で、パンを何個か見繕った。

「…で、屋上にいくまでの時間潰しで、ここに来たと」

狭く暑苦しい箱部屋の中に、俺は来ていた。

「いいだろ？一応、部員なんだし」

俺は、カレーパンにパクついていた。

「何を言う…幽霊部員が」

ここは、昼の放送室。

みんなが休んでいる間、缶詰状態で音楽をかけていなければならない……むさ苦しい場所だ。

そんな寂しい行為をしなければいけない……放送部部长半田純一は、ただラジオを流すのではなく、

自分で選曲し、きっちりと昼休みが終わるまでかけていた。

どうして俺が、放送部の幽霊部員になっているかというと……それには理由があった。

昔の彼女に傷付けられた帰り道で、俺の心を癒した曲……アル・クーパーのジョリーをかけたからだ。

その曲を学食で聴いた俺は……ご飯を喉にかきこむと、急いで放送室に向かった。

初めていく放送室のドアを思い切り開け、

俺は叫んだ。

「この曲は、何ですか？」

アル・クーパーの赤心の歌というアルバムの三曲目に入っている……ジョリー。

それが、俺の衝撃の曲だった。

「次、これかけてよ」

俺はアル・クーパーのアルバムを、純一に差し出した。

純一の中にある流れを遮断する行為だが、

いつものことだ。

俺が来たことで、覚悟はしていただろう。

「好きだな…」

純一は苦笑すると、アルバムを開け、CDを取り出した。

「まあな」

俺は、音が流れるを待つ。

CDがデッキにセットされた。

流れるようなイントロが、学校中に響く。

俺の心は弾み、自然と鼻歌を口ずさんでしまう。

「よく飽きないな」

そんな俺を見て、純一は感心した。

「飽きるかよ。名曲は何回聴いても飽きない。それに、お前がこの曲をかけなかったら、俺は…ここにはいなかったからな」

「そうか…」

純一は、アルバムを手を取った。

しばらく、見つめてから…おもむろに口を開いた。

「だとしたら…俺のせいではないな…。幽霊部員を獲得したのは」

フツと笑い、

「これは、俺のCDではないからな」

アルバムを俺に渡した。

「え？」

今の言葉に、少し驚いた俺を見ないで、次にかける曲を探している純一は、ジョリーのサビに耳を傾けながら、

「借りてるんだよ」

「え！だ、誰に？」

「勿論、この学校の生徒さ」

純一の次のCDを、対にあるデッキにセットした。

ジョリーが終わると同時にかける為、ボリュームのつまみに手をかけた。

「ある日、放送室に持ってきたんだよ。なんでも、今住んでる家には、CDをかける機械がないから…たまに、学校でかけてほしいってさ」

無理言って、ごめんなさい。

と言って頭を下げる生徒を、純一は憶えていた。

「まあ、聴いたことはなかったけど…名曲だとは知ってたから、早速かけてみると…」

純一は俺を見て、

「お前が釣れた」

「え」

「それからは…お前が部員になって、結構かけてるから…その子も、喜んでるだろうよ」

ジョリーが終わり、次の曲が始まる。



俺も屋上に行く為に、椅子から立ち上がった。

放送室から出ていく前に、俺は気になることをきいた。

「このCDを持ってきたやつは、誰だよ」

「お前と同じクラスのはずだけど」

純一はデッキから、アル・クーパーのCDを取り出し、丁重にケースの中に戻した。

「誰だよ？」

俺は平然とした態度できいたが、

なぜか…心の中は、ドキドキが止まらなかった。

純一のこたえを待つ。

「片桐…だったよな？名前」

純一は、そんな俺の動揺を知らずに、逆に聞き返した。

「お前んとこの…あの美人」

「あ、ああ！」

俺は深く頷いた。

まさか…ここにも、運命のプラグがあったとは。

俺は興奮しながら頷き…放送室を後にした。

まさか。

片桐も好きだなんて。

俺達はやっぱり…

結ばれる運命だったのだ。

スキップして、屋上に向かった俺は、

鉄の扉を開けた瞬間に、

さっきまでの幸せは、

どこかに消えた。

## 彼女

日光の下にいる…気難しい顔をした三人を見た瞬間、

俺の笑顔は消えた。

つまらないことを言われるな。

覚悟できていたけど、

面と向かって…そいつらの口から言われたら、やはり気分はよくない。

「率直に、きくぞ」

正利は、俺が屋上に顔を出した瞬間、近付いてきた。

渋い顔をした正利よりも、その肩越しから感じる美佳の視線に気が付き、俺は目をそちらに向けた。

すると、すぐに美佳は視線を外した。

「…」

俺は、言葉にはできないものを感じて、軽くため息をついた。

「お前は、何を考えているんだ」

正利の強い口調も、どうでもよくなった。

「すまない」

俺は、三人に背を向けた。

「太一！」

俺は正利の声を無視して、屋上から出ていった。

急いで、階段をかけ降り、俺はできるだけ、屋上から離れてることにした。

あのまま、あそこにいれば、何かが壊れる…そんな気がした。

「何…逃げてんだか…」

自分自身に毒づきながら、俺は校舎から飛び出した。

やつらがいる校舎から、離れたかった。

一番近い外への出口へ走った。

そこは、渡り廊下だった。

屋上と同じ日差しなのに、なぜか…少し心が軽くなった。

背伸びをした俺の体を、風が吹き抜けた。

「あっ」

俺は腕を、太陽に向けたまま…動けなくなった。

「うん？」

渡り廊下の手摺に頬杖をついていた生徒が、俺に気付き、

微笑んだからだ。

「片桐…」

予想外の片桐との遭遇は、俺の心臓を止めた。

（畜生）

俺は心の中で、感嘆した。

離れて見る片桐は、あんなに触れあった昨日よりも…綺麗に思えた。

俺は、まだ…気づいていない。

自分自身の本当の気持ちに。

悲しみを忘れる為に、恋をするのではなく、

愛する女を大切ににする為に、恋するのだ。

例え、傷つくことがあっても、愛するという気持ちが…俺を勇気づける。

この時、

俺の心の底で、

俺は誓っていた。

この愛しく…大切な人を守りたいと。

「よお」

軽く挨拶し、片桐に近づく…一步一步が、さっきまでと違うことに、

俺はまだ気付いていない。

「何してるの？」

俺が少し緊張しながら、片桐に話かけると、

彼女はクスツと笑い、

「見ての通り…ぼおっとしてるだけ」

手摺から手を離し、背伸びをした。

「1人で？」

俺は、流れるような片桐の体の線に目がいった。

「そうよ」

背伸びを終え、俺を見た片桐から、

思わず視線をそらした。

「という…神谷君も1人じゃない。どうしたの？」

「た、たまにはさ…1人もいいかなって」

「たまにはねえ。いつも1人のあたしに対する嫌みですかな？」

「え？」

俺は驚き、片桐を見た。

少し睨むような片桐の目に、俺は焦ってしまった。

「あ、その…ごめ」

「冗談よ」

謝ろうとした俺の言葉を、片桐は遮った。

そして、俺から視線を外し、昼休みのグラウンドを見た。

もうすぐ昼休みも終わるから、グラウンドから引き上げていく生徒が多い。

「な、何だ…冗談かよ」

片桐の横顔を見つめながら、俺は胸を撫で下ろすフリをした。

本当に…冗談だろうか。

俺に対しては、そうだろうが…自分自身に対しては違うような気がした。

触れることのできない…ガラス細工のような彼女に、

俺はゆっくりと近づいた。

（そう言えば…誰かというのを見たことないな）

別に、取っ付きにくい訳ではない。



話してるところは、クラスでは何度か見た。

だけど…彼女は1人なのだ。

俺は…片桐と少し距離を開けて、手摺にもたれた。

誰かに見られても、おかしく思われない距離を開けて。

少し…互いに無言になった。

すると、校内に響く音楽が耳に入ってきた。

さっきまでは、耳に入らなかったが、少し落ち着いたからだろうか。

「あ、あのさ…。さっき…かかっていた曲知ってる？」

もう15分くらい前だけど、俺は片桐にきいた。

「アル・クーパーのジョリーって、曲」

その曲名を聞いた瞬間、片桐は驚いたように、目を見開いた。

「いい曲だろ？」

俺は、片桐の方を見た。

片桐は見開いた目を：ゆっくりと細めると、優しく微笑んだ。

「でも…」

片桐は髪をかきあげ、

「悲しい歌よ」

片桐は手摺から離れると、歩き出した。

俺の前を通り過ぎる時、

「そんな曲が：好きなんだ」

呟くように言った。

俺ははっとして、手摺にもたれるのをやめた。

そして、片桐の背中に叫んだ。

「お、俺は！悲しい曲だとは思わない！幸せに一番近い曲だと思ってる！」

俺の声に、片桐は足を止め、振り返った。

「この曲の歌詞と、背景を知ってる？それを知ったら…」

「そんなこと関係ないだろ！俺は歌詞の内容も、背景も知らないよ！だって、英語がわからないから！だけど！」

俺の言葉は止まらない。

「俺は、この曲が好きだ！この曲で、幸せな気分になれた！だから、俺にとっては…幸せにさせる曲なんだ！」

いつのまにか…片桐は俺の方に体を向け、笑っていた。

「あっ…。ごめん」

俺はなんか…謝ってしまった。

「馬鹿ね。謝る必要なんてないのに」

片桐はクスツと笑った。

そして、微笑みながら…反転した。

「最高じゃない」

そう言うと、教室に向かって歩き出した。

俺は興奮が取れずに、片桐の背中を見送った。

見えなくなる頃、昼休みが終わるチャイムが、校内に鳴り響いた。

教室に慌てて戻ると、自然に席に着いている片桐に目がいったけど、

俺の周りから向けられる…三つの射ぬくような視線を感じ、

自分がしたことを思い出した。

(どうしよう…)

と一瞬思っただけ、考えるのをやめた。

(まあ…いいか)

だって、あいつらは…片桐と話することが駄目だと言ってるんだから。

(あいつらは、知らないんだよ。片桐の良さを)

俺は、授業の準備をしながら、片桐が後ろの席であることを呪った。

斜め前ならば自然と、片桐を見てられるのに。

そんなことを考えている時、

その斜め前に座る美佳が…悲しい目で、俺を見てることに、まったく気づかなかった。

上の空の授業がすべて終わると、

俺は急いで帰る為に、片付けをしていた。

正利が、俺の方へ行こうかと悩んでいたが…唇を噛み締め、近づくのをやめた。

「た、太一！」

美佳だけが躊躇いながらも、俺に向かって振り返った。

多分、勇気を出して言ったのだろうけど、

その時には俺は…教室から出ていた。

「太一…」

美佳は、俺がいない席を見つめた。

あまりの早さに、総司も驚いていた。

そんなクラスの中を、片桐が悠然と歩いていった。

「？」

変な空気を感じながら、片桐は廊下に出た。

しばらく歩いていると、

「片桐」

俺が後ろから、声をかけた。

身を屈めながら、素早く脱出するという技を初めて使った俺は、  
にこにこしながら、片桐に近寄った。

片桐は少しため息をつくと、

「いつのまに…」

呆れたように、俺を見た。

そんな表情も、俺は愛しい。

にと子供のように笑うと、俺は片桐の手を取った。

「いっしょに帰ろう！」

駅へと向かう正門ではなく、裏口へと片桐を導いていく。

「まったく…」

嫌がるかな…と心のどこかで、そう思っていたけど、

素直についてくる片桐がさらに、愛しかった。

嫌々でもない。

口では少し文句を言ったけど、笑顔だった。

俺は手を引きながら、ずっと片桐のことを思っていた。

浮わついた気持ちではない。

俺といて、彼女に楽しく感じてほしいだけだった。

**触れたい・・・すべてに**

昨日…キスした公園まで、俺は片桐を連れてきた。

相変わらず、誰もいない。

俺は昨日と同じように、夕陽に照らされている遊具達を見た。

片桐の腕を離すと、俺は真っ直ぐに彼女を見た。

「俺さ…」

夕陽に照らされても、それ以上に綺麗な彼女に目を細めながら、俺は言葉を続けた。

「前まで…好きになった人には、気持ちを真っ直ぐにぶつけ…その人の為に、何でもしたいと思ってた」

片桐は、突然の俺の言葉に…少し驚いたようだが、すぐに優しい顔になった。

「大切にしたいとだけ思っていた。だけど…」

俺は、片桐から少しだけ視線を外し、

「その気持ちは、大切だけど…。一番、大切なのは…俺の気持ちよりも、大切な人の気持ちなんだ」



俺は夕陽を見つめた。

「ただ…大切にしたいと、自分勝手に思ったら、いけないんだよ。いっしょに考え、大切な人と考えながら、一步一步…進んでいくことが、一番大事なんだよ」

俺は、片桐に手を伸ばした。

「俺は…片桐を大切にしたい。だから、昨日のようなことで、始まるんじゃないって…。ただ大切に思う気持ちから、始めたい」

「…」

片桐は目を伏せた。

「片桐…」

しばらく…無言の時間が過ぎた。

でも、俺は待つ。

例え…夜が来ても。

「ありがとう」

やっと発せられた言葉は、涙とともにだった。

「だけど…あたしは、大切に思われる資格が…」

俺は、これ以上…言わせなかった。

片桐をぎゅと…思い切り抱き締めたからだ。

俺は、片桐の華奢な体を抱き締めた。

「資格なんていうなよ。俺が、そうしたいんだから…。愛される資格なんてものは、誰にもないんだ。ただ…自分じゃない誰かが、自分を好きになった…。それだけなんだ」

俺はもう一度、強く抱き締めた後、

「ただ…願うのは、片桐も俺をほんの少しだけでも…見てほしい」

俺は、片桐をゆっくりと離すと、彼女に微笑んだ。

「無理はしないでいい。ほんの少しつづでいい…」

俺の言葉に、片桐は泣きながら苦笑した。

「馬鹿ね。もったいい子が、いっぱいいるのに」

「いないよ。俺の心が、そう言っている」

俺は、できる限り…優しく微笑んだ。

壊れそうな彼女に…。

改めて…抱き締めて、気づいた。

彼女は…。

壊れそうな程…傷付いている。

彼女の全身に走る傷口は、まるでひびのように、広がっている。

思い切り抱き締めたら、破片と化して…壊れそうだ。

普通なら、そう思うだろう。

でも、違う。

程度は低いかもしれないが、壊れかけた俺にはわかる。

逆なんだと。

壊れかけた心は、誰かに抱き締められて、

ぎゅっと抱き締められて、

傷口がくっ付き、さらに強い絆へと変わるのだ。

昨日の俺のように。

「でも…」

片桐はいきなり顔を伏せ、俺から離れようとする。

「誰かを好きになる…心がないの。多分、今は…そういう心を失っているの。離婚してから…」

片桐は、俺に背を向け、

「その前に…本当に好きだった人に、気付いたの。そして、あたしにした行為は、その人にすぎることだった」

「…」

俺は、離れた片桐に手を伸ばせなかった。

片桐は笑い、

「こんなことになってから…自分を押し付けようとした。その人の好きな気持ちを利用して…」

片桐は俺を見ないように、振り向き、

「最低…だよね。だから、あたしは…その人からも、みんなからも、離れた」

頬から、涙が流れた。

「それが、誰も傷つけない…一番の方法だから」

そう言うと、片桐は俺にまた…背を向けた。

（ああ…そうか）

俺は納得した。

だからかと。

だけど、

それでいいわけがない。

俺は、片桐の背中に向かって言った。

「馬鹿だろ！」

「え？」

驚いた片桐が、俺を見た。

俺は片桐を軽く睨み、

「誰も傷つかないって…片桐！お前自身は、傷付いたままじゃないかよ！」

（畜生！）

俺は毒づきながら、前に出た。

そして、片桐の体を前に向かせると、思い切り抱き締めた。

「お前が…傷付いたままだろうが！」

そうだろ。

誰も傷つけない。

そんなことはがり考えて、

自分はどうでもいい。

そんなことがいいはずがない。

だけど…

そんな片桐が、

たまらなく、

愛しかった。

「俺のわがママをきけ…きいてくれ！」

俺は片桐が離れないように、強く抱き締め、

「俺のそばにいてくれ。これは、俺のわがママだから…」

2人の間に、少しの沈黙の時が過ぎた。

俺の腕の中にいる片桐の鼓動と、ちようど鼻腔にあたる…髪の毛から漂うシャンプーの香りだけを、俺は感じていた。

「神谷くん」

片桐は、抱き締めている俺の腕に、そつと…手を置いた。

「…でも、あたしは…」

片桐が口に出そうとする言葉を、俺はさらに抱き締めることで遮ろうとした。

「…たっちゃん？」

その時、俺の心臓を止める声がした。

俺の頭が気づく前に、心臓が気付いた。

息も止まる。

さっきまで、俺達しかなかった公園に、

あいつがいた。



いや…厳密には、あいつらだ。

「やっぱり、たっちゃんだ！」

嬉しそうに笑う…あいつ。

そして、その横に男がいた。

片桐を繋ぎ止めていた腕が、下に落ちた。

「久しぶりだね。元気にしてた？」

俺を見つめる…あいつ。

その隣にいる男を、俺は知っていた。

店の常連だ。

三回離婚してる男。

あいつは言っていた。

あんな…女を幸せにできない男は嫌だ。

と、

言っていたのに…。

（何が、俺の知らない男だ！）

そんな最低の男に、俺は負けたのか。

あいつは、四回目の女になったのか。

目を見開き、動けない俺を…自由になった片桐が見つめていたが、俺は気付かなかった。

## 馬鹿にするな！

中年のガタイのいい男と手を繋いでいるあいつは、髪をかきあげ、

「もしかして、たっちゃんの彼女？」

にやにやしながら、きいた。

「フン」

隣の男は鼻を鳴らした。

もともと、俺をよくは思っていない。

「こんなところで、会うなんて…。そっか！たっちゃんの学校、この近くだったよね」

あいつは笑顔になり、

「あたしね。結婚したから、この近くに引っ越したんだ」

きいてもいない近況を話し出した。

あんな別れ方をしたのに、屈託のない笑顔で、話しかけてくるあいつが、

俺には信じられなかった。

「ところで、たちちゃん。隣の女の子は、彼女なの？」

こたえなかった俺に、あいつはまたきいた。

「そ、それは・・・」

まだ片桐とは、つき合っていない。

だから、否定しようとしたけど、言葉がでなかった。

「ねえ・・・彼女？」

しつこくきいてくるあいつに、仕方なくこたえようとすると、

「そんなわけないだろ」

突然、隣の男が口を開いた。

俺を見下ろしながら、

「こいつは年上が好きなんだろ？まあ・・・また口説いたとしても、  
また駄目だろうがな」

勝ち誇ったように言うど、あいつの肩を抱いた。

「な」

俺は目を見張った。

この男からすると、俺からあいつを奪ったということになるのか。  
舐められた態度に、俺はキレそうになった。

「おあいにく様」

今にも殴りかかりそうな俺の腕に、片桐の細い腕は絡みついた。

片桐は、俺と男の間に入る形になり、

「あたしは、この人の彼女ですから」

男に向って、微笑んだ。

「ねえ・・・太一」

片桐は、初めて俺の名前を呼び、

「このおばさん達、知ってるの？」

「え？」

「感じ悪いし…向こう行きましょうよ」

戸惑う俺を、強引にその場から移動させた。

「へえ〜彼女なんだ」

男は離れていく俺に、言った。

「今度は、若いのを捕まえたんだ。まあ、せいぜい、フラレるなよ」

ははと笑う男に、俺が完全にキレ、襲いかかろうとした。

だけど、片桐がしっかりと俺の腕に掴んでいるから、動けない。

「馬鹿にするな！」

何とか腕を振りほどこうとする前に、片桐が叫んだ。

片桐は、男を睨みつけ、

「この人は、あんたなんかより、いい男よ！」

それだけ言うと、フンと前を向き、俺を引っ張って歩き出した。

「か、片桐！」

あまりの力の強さに、俺はただ引きずられるだけだ。

「何だ・・・あの女！」

男は唾を吐いた。

「たっちゃん．．．」

離れていく俺に、あいつが声をかけた。

俺があいつの方を見ると、悲しく微笑んでいた。

「．．．」

俺は、さよならも言わずに．．．あいつから離れた。

だけど、

だからといって、引きずっている訳ではない。

今は．．．ただ．．．。

前を向くと、俺を手を引く片桐がいることが嬉しかった。

公園を出ても、まだ引っ張る片桐は．．．怒りがおさまらないよ  
うで、

「何よ！あの男！馬鹿にして！」

まだ毒づいていた。

そんな片桐がおかしくて、俺は笑った。

「ありがとう。お陰で、すっきりしたよ」

「え？」

俺の冷静な言葉に、片桐は足を止めた。

そして、我に返ると、

俺の腕を離し、

「ご、ごめん！あたし．．．かっとなって」

顔を真っ赤にして、頭を下げた。

「いいよ！スカッとした」

「で、でも．．．今の人．．．前の彼女でしょ」

「いいよ。そんなこと」

本当に：今はどうでもいい。

俺は、狼狽えている片桐の腕を掴んだ。

「え」



そして、驚く片桐の目を見つめ、

「絶対、離さない」

と心に誓った。

## 言葉を越えて

今…

何を言ってもうそくさい。

いや、言葉なんかで…

本当に深い傷は癒せない。

だから、全身で伝えたい。

俺の気持ちを、俺の鼓動を。

俺は片桐を引き寄せると、ただ抱き締めた。

ただ…強く抱き締めた。

その単純な行為に、いろんな思いを詰め込んで…。

片桐は目を瞑り、ゆっくりと…少し戸惑いながらも、俺を抱き締め返した。

その日。

暗くなるまで、抱き締め合った俺と片桐は、そのまま…別れた。

勿論、家まで送ったけど。

微笑みながら、別れる2人。

妙に照れてしまった。

「じゃあ」

「うん」

それだけのくすぐったい会話を交わし、離れる2人は…この上なく、幸せだった。

手を振る片桐に見送られながら、駅に帰る俺は、

軽くスキップを踏んでいた。

そんなことにさえ、自分では気付かない。

定期を通し、電車に乗り…最寄り駅の改札をくぐるまで、俺のスキ

ツプは止まらなかった。

「太一！」

改札の前に立つ…美佳に会うまでは…。

思わず足を止めた俺に、美佳はつかつかと近づいてきた。

この駅は、改札が一つしかない。

逃げる場所はない。

そもそも、どうして俺が、逃げなくちゃならない。

俺は足を止め、美佳の顔を見た。

力んで、少し睨むような目付きになっていました俺を、美佳は睨み付け、

「いつになったら、やるんだ！おれと音楽！」

とだけ…言った。

それは、俺の予想と違っていた。

（俺は…てっきり……！？）

てっきり…何だ。

自分で言おうとしたことを、俺は否定した。

「今度…学校の音楽室で、軽音がライブやることが、決定したんだ。ドラムが足りなくて、おれも参加することになった。勿論、お前もな！」

美佳は、俺を指差した。

「え!？」

突然の美佳の言葉に、俺は目を丸くした。

「えじゃない!おれをその世界に、引き込んだのは、お前だろ!」  
キレた口調の美佳に、俺は慌てながら、

「む、無理だろ!俺は、楽器が弾けないぞ!」

「そんなことわかってる!」

美佳は顔を近づけ、

「だから、今回は一曲だけ歌え!お前に、音楽の素晴らしさを教えてやるのが、目的だからな!」

「な！」

いきなり、一曲歌えだど。

それも、人前で。

「む、無理に決まっているだろ！」

「もう決めた！」

きっぱりと言い切る美佳。

「か、勝手に、決めるな！」

キレる俺に、美佳は目を細め、

「こうでもしないと、お前は一生…音楽をやらないだろ」

「そ、それは…」

俺は口ごもった。

美佳がドラムを始めたのは、自分のせいだとわかっていたから、

少し後ろめたい気持ちがあったからだ。

そんな俺の動揺に気付いた美佳は、心の中でにやりと笑うと、

「とにかく決まったからな！」

いつのまに作っていたのか…ライブのチラシを見せた。

参加メンバーには、なんと俺の名前が…あった。

そのチラシを見て、俺はがくつと肩を落とした。

もう断れる話ではなくなっている。

（周りから…固めやがったな）

強行手段を行った美佳を、恨めしく思った。

「じゃあな」

それだけ言うと、美佳は俺の横を追い越し、改札の中に入った。

「待てよ！」

俺は振り返り、美佳の背中に叫んだ。

「何の曲をやるんだよ！」

俺の声に足を止めた美佳は、振り返ったが、

俺の目を見ずにこたえた。

「アル・クーパーのジョリー」

「え!？」

美佳の口から出た…その曲名に、俺は凍りついた。

「す、好き…なんだろう？」

そう言うと、美佳は前を向き…走り出した。

俺は、美佳からあの曲名が出るなんて…予想もしていなかったから、

ただ…驚いてしまって、しばらく声がでなかった。

「どうして…あいつが」

美佳の背中が見えなくなる頃、やっと俺は声が出た。

首を傾げたところで、理由はわからなかった。

「さんざん…学校でかけてるからかな」

まあ…あまり深く考えることなく、俺は改札に背を向けて、家路へと足を進めた。



俺とは逆に、美佳はプラットホームに出る前に足を止めて、振り返りそうになった。

「どうだったの？」

乗り越し精算機の影に、隠れていた総司が顔を出した。

「一応：言うだけは言った」

少し悲痛な表情をしている美佳を見て、総司はたまらなくなった。

だけど、どうしようもできないことはわかっていた。

美佳が、どれほど太一を好きなのかも。

「そっか」

その言葉くらいしか：総司は言えなかった。

お節介な正利なら、ずけずけ言うかもしれないけど。

美佳の顔をまともに見れなくて、顔を伏せてしまった総司に、

無理に元気を出した美佳が言葉をかけた。

「ありがとうな」

「え」

総司が顔を上げると、笑顔をつくった美佳の顔があった。

「お前がついて来てくれたから…あいつに言うことができたよ……  
ありがとう」

美佳は頭を下げると、走り出した。

もう友達の前で、笑顔でいるのは限界だった。

太一にも、強引に…無理矢理押し付けた。

嫌われたかもしれない。

だけど…今の美佳には、それしかない。

「橘！」

総司は、走り出した美佳の背中に叫んだ。

「そんな…無理矢理…嫌なことをするなよ！やっぱり、無理はよくないよ！」

総司の言葉に、美佳は足を止めた。

「だって…だって…」

美佳は拳を握りしめ、

「仕方ないだろ！」

叫んだ。

「美佳…」

総司は、美佳の感情を感じ取り…動けなくなった。

「だって、仕方ないだろ！」

美佳は振り返った。

「おれと太一の間には、音楽しかなんだ！それしか…ないんだ！」

振り返った美佳は、泣いていた。

（ああ…）

総司は、何も言えなくなった。

走り去っていく美佳の背中に向かって、腕を伸ばすだけしかできなかった。

（僕は…何もできない…）

友達ではあるけど…それ以上ではない。

慰めることもできなかった。

ただ近くで、美佳が傷つくのを…見守っていただけだ。

影に隠れて…。

「馬鹿野郎…」

総司はその場で、項垂れた。

## スローダウン

「一曲：歌えだど！どうして、俺が！」

強引な美佳のやり方にムカついたけど：

やる曲がジョリーと聞いて、少し悩んでしまった。

あの曲は、片桐も好きだからだ。

「だからと言って、ライブに呼べるかよ」

俺は、頭をかいた。

もう半分以上：参加する気になっている自分に、俺は気付いた。

「今回は：断りにくいな：」

心のどこかで、美佳に後ろめたい気持ちがあった。

一度でも同じステージ立てば、少しは気持ちも晴れるだろう。

「仕方ないか」

俺が、歌うことを心の中で承諾しかけた時、

後ろから声がした。

「太一！」

「うん？」

俺が振り返ると、後ろに息を切らした総司が立っていた。

「総司…どうして、ここに！？」

俺は少し驚いてしまった。

総司の家は、この辺りでない。

駅でいうと、学校を挟んで、同じくらい反対方向に向かわないといけない。

「た…」

総司は拳を握りしめると、

「太一！」

俺に向かって突進してきた。

「どうして、お前は！」

握りしめた拳を、俺の顔面に叩き込もうとしたけど、

俺は簡単に避けた。

残念ながら、総司に運動神経はない。

勢い余って、こけそうになった総司に、俺は手を伸ばした。

腕を掴んだ俺を睨むと、総司は俺の手を振り払った。

「触るな！」

よろけながらも、総司は俺を睨み付け、

「どうしてなんだよ！」

叫んだ。

俺はさっぱり…意味がわからずに、また頭をかいだ。

「それは、こっちの台詞だ。どうして、殴りかかれなくちゃならないんだ。理由を言えよ」

何の理由もなく、こういうことをするやつとは思っていない。

「総司。何が……！？」

総司に近づこうとした俺は、足を止めた。

相変わらず睨んでいるけど…それだけではなかったのだ。

その睨む目に、涙が滲んでいた。

「総司…」

俺には、その涙の理由がわからなかった。

でも、俺に否があるなら…謝った方がいい。

「…ご、ごめん…。昼休み、お前から逃げて」

理由としたら、それしか思い浮かばなかった。

「だってさ…仕方ないだろ」

俺は、総司から目をそらした。

「どうして…どうして！」

総司は瞳に涙を溜め、

「あんな闇を背負った女がいいだよ！」

また殴りかかってきた。

そんなことをする総司に驚きながらも、俺は簡単に避けた。



「闇？」

俺は眉を寄せた。

「あんな女！」

俺は、理解した。誰のことかを。

「総司！」

「太一！」

俺は、総司を睨み、

「それでも、俺は！好きになったんだよ」

今度はバランスを崩すことなく、総司は振り向きざま、腕を突きだした。

「自分の闇も拭えないのに！他人の闇まで、背負えるか！」

鬼のような形相で襲いかかる総司を見ると、

俺は次第に切なくなってきた。

「総司……」

俺は避けることをやめ、総司の拳を手で受け止めた。

「昔の女のことを、引きずってる癖に！」

それでも、拳を押し込んで来る総司。

「…」

俺は、総司を見つめた。

総司の口から出た…本音は、正しかったんだろう。

だけど。

俺は、総司の拳を握りしめ、総司に顔を近づけた。

「総司！今の俺を見ろ！」

俺の言葉に、総司は顔を上げた。

目が合う二人。

俺は総司の目を見つめ、

「俺の中にあつた…もう聞はないよ」

「あ…」

総司も気付いたみたいだ。

俺は言葉を続けた。

「俺の闇を払ってくれたのは、片桐だ！今度は、俺が…片桐の闇を払ってやりたい」

大きく見開いた総司の目から、溜まっていた涙が一気に流れた。

「わかってくれ」

俺は頼むように、総司に頭を下げた。

「…」

総司は俯くと、しばらく無言になった。

だけど、丸まった背中が小刻みに震えていることに…俺は気づいていた。

「総司…」

「…だとしても！」

総司は、俺の手から強引に拳を抜くと、ふらつきながら、後ろ足で俺から離れ、

「許せない！」

先程より強く俺を睨んだ。

「総司……」

「あんな女のせいで……」

総司は、唇を噛み締め、

「太一のせいで！」

拳を握り締め、

「美佳が傷つくことは許せない！」

絶叫した。

そして、今度は……殴りかかることなく、

総司は俺に背を向けて、走り出した。

「総司！」

もう俺の方を、振り返ることはなかった。

なぜならば、握り締めた拳は：俺だけでなく、自分に対してもだつたからだ。

誰を殴っても、どうしようもない拳を握り締めながら、総司はその場から走り去った。

「な、なんなんだよ」

総司が見えなくなるまで、見送った俺は：深く考えるのをやめた。

そこから導く真実を、頭に残すことが嫌だったからだ。

できるだけ：考えないように。

ずるいかもしれないけど、それがいい。

頭を混乱させようと、激しく頭をかいた俺は、

再び家路へと向かった。

歩く俺の頭の中で、ジョリーが鳴り響いていた。

こんな時は、片桐に会って抱き締めたら、一発で元気になるのに…。

だけど、恋人でもない片桐に会いに行くのは、迷惑だ。

携帯も持っていないから…声も聞けない。

「我慢するか…」

とぼとぼと…俺の歩く速度が遅くなっていった。

自分でも気付かずに。

## ときめく夢

「…で、どうして、ここにいる」

昼休み。

いつの如く、選曲に忙しい純一の横で、俺はアル・クーパーのCDを指で挟んで、回していた。

「冷たいなあ。一応、幽霊でも、部員だぜ」

俺の言葉に、純一は鼻を鳴らした。

「そういうことは、部員らしいことをしてからに言ってほしいな」

「だから…」

俺はCDを、純一の前に差し出した。

「これ、かけてよ」

純一は、アル・クーパーのCDを見て、ため息をつき、

「好きだな」

俺からCDを受け取った。

「だから言っただろ？この曲を歌うんだと、その為に憶えなくちゃ」

ならないだよ」

「それは…わかったが」

純一はCDをセットしながら、

「家で聴けよな」

文句を言った。

「仕方ないだろ。持ってないんだから」

俺は腕を首の後ろに回すと、パイプイスにもたれた。

「買えよな」

純一はジョリーをかけながら、もう次の曲を選曲していた。

「まあ〜そうなんだけど」

俺は、空になったCDを見ながら、

「近くのCDショップには、なかったんだよなあ〜。多分、もっと大きな店にいかないと、売ってないんだろうな」

俺は、ため息をついた。

校内に、ジョリーが流れた。



天使の羽が落ちてくるような滑らかなイントロが、すべての人達を包む。

その優しさに気付くか…気付かないのは、その人による。

どんなにそばに、優しさがあっても、

人は気付かないことが多い。

「この曲は…」

昼食を終えて、渡り廊下へと向かっていた片桐は、廊下の途中で足を止めた。

自然と微笑むと、

「また…あいつか」

また歩き出した。

歌詞は…悲しい曲のはずが、何だか心が弾んだ。

だけど、バックの美しいメロディが、心地よかった。

今、この学校で…この曲をいいと思ってるのは、

多分…あいつの自分だけ。

それが、嬉しかった。

笑顔を浮かべながら、廊下を歩いていると、

前から誰かが来た。

その子は、片桐に気付くと、少し足を止めたが、すぐに歩きだした。

そして、すれ違った後、凍りついたように足を止めた。

「え？」

すれ違った生徒は、振り返り…片桐の背中を見送った。

「どうして？」

片桐とすれ違ったのは、美佳だった。

思わず、最初に足を止めてしまったのは、

片桐が笑顔だったから。

無愛想ではないけど、いつもクールなイメージがある片桐が、楽しそうだったから。

そして、すれ違ってから…もう一度足を止めたのは、

片桐が鼻唄を口ずさんでいたから。

メロディだけだったけど、それは今かかっている…ジョリーだった。

美佳が片桐の背中を見送っている途中で、ジョリーは終わった。

「知ってるの？」

ジョリーは太一の好きな曲。

だから、太一とライブでやることを決めた。

美佳は嫌な胸騒ぎを感じながらも、ぎゅっと胸を抱き締めると、自分の予感を否定した。

ほぼ毎日かかっているのだから、好きになる人もいるだろう。

「そうよ…そうだ…」

美佳は、目で片桐の後ろ姿を追うのをやめた。

「絶対！」

自分に言い聞かせるように力強く言うと、美佳は歩きだした。

「単なる偶然」

心の底では、そう思っていない。

だけど、認めたくなかった。

だから、美佳は唇を噛み締めた。

（悔しい…）

心の中で、無意識に呟いた。

ジョリーって曲は、特別な曲だった。

太一と自分を繋ぐ。

あの晩…太一が感動したと、自分に語った曲こそ…ジョリー。

放送部の純一から、太一がよくかけていると聞いていたから、間違いない。

美佳は、ジョリーを叩く為に、ドラマーになったのだ。

自分の大切な絆を汚されたように、美佳は感じていた。

渡り廊下に来た片桐は、大きく息を吸った。

吹き抜ける風が、気持ちいい。

いつもの定位置にもたれると、ぼおっとグラウンドを見た。

楽しそうにはしゃぐ生徒達の様子を眺めているだけで、片桐は満足だった。

まだ学生として、過ごせる時間。

この時間が終わったら、社会に出て…1人で生きていかなければならない。

本当は働きながら、夜間高校に通うつもりだったけど、

両親が普通の高校に入学させた。

あまりにも、娘を不憫だと思ったのだろう。

大学も行かしたいようだけど、片桐にもその気がなかった。

まあ…勉強しかすることがないから、成績は上がっているのだけど。

「はあゝ」

片桐の口から、少し本音のため息が出た時、

俺は渡り廊下に来た。

「何？心配事？」

少しだけ距離を開けて、渡り廊下の手摺にもたれた俺に驚きながらも顔を向け、片桐は微笑んだ。

「大丈夫：ありがとう」

「…」

すぐに、顔をグラウンドに向ける片桐。

大丈夫と言っても、どこか悲しみが漂っている片桐の横顔を見つめ、俺はしばし無言になった。

吹き抜ける風を、何度か見送った後、

俺は空を見上げた。

雲ひとつない：晴天だ。

「また：かけてたね」

「え？」

突然、話かけられて、俺は少し驚いた。

「あの曲」

「ああ」

俺は片桐に視線を向けると、こちらを見てクスッと笑う彼女がいた。

「気付いてた？」

俺はちよつと恥ずかしくなって、片桐の視線から逃げた。

「まあね。こう何度もかけられたら」

片桐は悪戯ぽく、手摺に頬杖をつくとき、赤くなっている俺を見た。

「す、好きなんだろう？」

ちよつとしどろもどろになる俺がおかしいのか…片桐は笑い、

「そう…好きよ」

片桐は少し、真剣な口調で言った。

好きという言葉に反応して、俺は片桐に視線を戻した。

真っ直ぐな瞳が、俺を見ていた。

俺は息を飲み込むと、吸い込まれそうな瞳から目をそらした。

(やばい)

俺の心臓が激しく、動いていた。

俺は胸を抑え、

(キスしたくなった)

片桐から少しだけ離れた。

(学校なのに…)

止まらなくなりそうだ。

思い切り…抱き締めたくなった。

俺は何とか、この動揺を悟られないように、話を続けた。

「ど、どうして…好きなんだ？」

「どうして!？」

片桐は俺の質問に、頬杖をやめると身を起こし、驚いた顔をした。

そんなことをきかれると思ってなかったのだろう。

だけど、すぐに片桐は返事をした。



「理由はないわ」

「え！」

思いがけない答えに、俺は片桐を見た。

片桐はまたクスツと笑うと、俺に近づき…至近距離から見上げた。

「理由なんていらないでしょ？好きになるのに」

俺は後ろに身を反らしながら、片桐の目を見つめていた。

綺麗な色だ。

淡い色。

俺は、身を起こした。

学校じゃなかったら、絶対抱き締めていた。

すると、片桐は一步下がり、

「とにかく…好きなの。どこで聴いたかも忘れたけど…あの曲が、好きなんだ」

初めて聴いたきっかけを思いだそうと、首を傾げる片桐に、

「もう…いいよ」

俺は笑いかけた。

そして、いつのまにか…優しい表情になり、片桐を見つめ、

「理由なんて、必要なかった。今、好きなんだから」

俺は、自分に言い聞かせていた。

過去はどうでもいいと。

だから、未来の話をしよう。

「片桐…」

「はい」

妙に真剣な俺の様子に、片桐は姿勢を正した。

「俺…今度、この曲をライブで歌うんだ。だから…見に来てほしい」

「ライブ？」

びっくりする片桐に、静かに頷くと、

「一曲だけだけど…人前で歌う。でも、その歌は…片桐1人だけに  
向けて、歌うから」

と言ってから、俺ははっとした。

（なんか…重かったか…。それともキザか…。お前の為だけなんて  
…）

俺は心の中で、頭を抱え、

（ひ、引かれてないか）

勇気を振り絞って、片桐を見ると、

彼女はまた手摺にもたれていた。

そして、遠く見ながら…呟くように言った。

「あの曲は…悲しい曲よ」

俺は、息が詰まりそうになった。

そんな悲しい曲を、あたしの為に歌うの？

彼女の横顔が、そう言っていた。

だから、俺は叫んだ。

「例え、悲しい曲だとしても！俺が幸せにしてみせる！」

俺は、英語の歌詞なんて理解していない。

その曲が、どういう背景で作られたかも、詳しくは知らない。

だけど、

この曲の美しさと優しさを感じている。

「例え…悲しい曲でも！俺は幸せにしてみせる」

何か…おかしな口調になったけど、言いたいことはそうだ。

驚いた片桐が、目を丸くして、俺を見ていた。

そして、しばらくしてからふきだした。

「何か…曲にプロポーズしてるみたいね」

「え」

「アハハハ」

お腹を抱えて、笑う彼女。

「な、何だよ」

俺はあまりに笑うものだから、顔を真っ赤にした。

恥ずかしさに思わず、逃げ出したくなったけど…足が動かなかったのは、

笑う片桐の様子に見とれていたからだ。

お腹を抱えて笑う片桐は、どう見ても…普通の高校生…いや、綺麗な高校生だ。

（こんな…片桐を初めて見た）

俺は、自然な姿の片桐を初めて見れたような気がした。

ずっと…見ていたかったけど、

昼休みが終わるチャイムが鳴り響いた。

片桐は何とか笑いを止めると、笑い過ぎて出た涙を指で拭いた。

そして、歩きだすと、

「楽しみにしてるわ」

すれ違いざま、耳元で囁くように言った。

「う、うん…」

俺は、子供のように頷いた。

片桐の余韻に包まれて、

俺は教室に戻るのが、少し遅れてしまった。

「おい！」

最後の授業の終わりとともに、俺は席を立ち、

美佳の横に立った。

「練習するんだろ？」

「え」

俺の言葉に、教科書を片付けていた美佳の動きが止まった。

驚いて見上げた美佳の目に、俺の後ろを通り過ぎる片桐の姿が映った。

俺よりも、片桐の動きを目で追った美佳は、

片桐が教室を出るのを確認すると、

「いっしょに帰らないんだ…」

呟くように言った。

「何言ってるんだよ！ライブまで、そんなに時間がないんだろ。早く練習するぞ」

「お、おう」

突然やる気を出した俺に戸惑いながら、美佳は慌てて席を立った。

## 言葉以上の言葉

美佳に連れられてやってきた軽音部の部室は、女だらけだった。

どうやら、男の部員はいないようだ。

そんな女だらけの軽音部で、なぜか…一曲だけ歌うことになった俺を、部員がじろじろ見た。

一応、俺の簡単な紹介が終わると、

美佳はいっしょにバンドを組むことになるメンバーに言った。

「こいつは、一曲だけだから…練習は、いきなり合わせてやるぞ」

部室から、隣にある簡易スタジオに移動すると、美佳はドラムセットの中に入った。

「ねえねえ」

ベースの綾瀬がチューニングを合わせながら、ドラムセットに近づき、美佳に耳打ちした。

「あの人…美佳の彼氏？」

にやにやしながらきいてくる綾瀬の目の前にあるシンバルを、美佳は叩いた。



「ヒィ！」

耳元でシンバルが響き、綾瀬はドラムから飛び退いた。

「違う！」

それだけ言うと、美佳は前方を睨み唇を噛みしめながら、リズムを刻み出した。

「理子！始めるぞ」

キーボードの前に立つ理子と呼ばれた女の子が頷くと、あの印象的なイントロを奏でた。

どうやら：俺抜きで、練習していたようだ。

バンドはスムーズに、ジョリーを演奏しだした。

「え？」

さすがに、原曲の豪華な感じは出ていないが、バンドサウンドの骨組みはしっかりと出来ていた。

バックのオーケストラ的なアレンジは、キーボードが担い、

あとは俺の歌とコーラスが入れば、俺らのジョリーができる。

俺は慌てて、マイクに口を近づけた。

うる覚えの英語で、俺は歌ったけど、

カラオケとは違い、案内してくるメロディーがない生演奏は、一度狂えば…曲を見失ってしまう。

心の中で舌打ちしながら、何とか遅れることなく、歌い切ったが、音程がバラバラだった。

「チキショー」

悔しがる暇もなく、

「もう一回！」

後ろで、美佳がカウントを取り、再び演奏を始めた。

「え」

驚いてる暇はなかった。

イントロが終わると、すぐに歌わなければならなかった。

何度も演奏する度に、精度を上げていくバックと違い、

俺は声が出なくなり、歌い切ることができなくなっていた。

もう30回以上は歌っている。

生音の音量に負けないように、張り上げなければならぬから…喉の負担は、カラオケなんかと比べものにならない。

「太一！お前の練習は、ここまでだ。明日も、同じことをするからな」

喉が枯れた俺を押し退けるように、ベースの綾瀬がマイクスタンドの前に立った。

これから、彼女らだけの練習となる。

当然だ。

彼女達は、一曲で終わるはずがない。

次の曲が始まる前に、邪魔な俺はスタジオから出た。

ふらふらになりながら、部室を出た俺は…途中、廊下の壁に手を当てる、休んだ。

頭がガンガンした。まだ、音が耳の奥にこもっている。

「歌うことが…こんなに疲れるとは…」

音の塊を全身で感じ、そのプレッシャーに圧倒された。

特に、ドラム。

真後ろから、背中を切り裂くような鋭い音を浴びせられていた。

「ジョリーって…あんな曲だったか…」

俺は後ろから、殺気に似たものをつねに感じていた。

校舎から、よろよろになりながら、飛び出した俺は…裏口を見た。

片桐がいたら、裏口から帰るのだが…。

駅に近い正門に向かって、歩き出した。

片桐も…多分、正門から帰ったと思うし。

とぼとぼと疲れながら、正門に向かって歩き出した俺は、

途中で足を止めた。

なぜだろう。

心がざわめいた。

俺は振り向くと、走り出した。

全力で。

どうしてかは、わからない。

そんな気がしたのだ。

何時に練習が終わるか、わからないのに…。

彼女がいる気がしたのだ。

待ち合わせもしていないのに。

俺は…足がもつれて、転倒しそうになりながらも、

裏口へ走った。

「はあはあはあ…」

激しく息をしながら、裏口を通ったけど、

片桐はいない。

俺はキョロキョロと周りを探した。

すると…。

「なんだあゝ。元気そうじゃない。初日だから、しごかれているか  
と思ったのに」

後ろから声がして、俺が振り返ると、

笑顔の片桐がいた。

「はい」

そして、手に持っていた健康飲料水の缶を俺に向かって、投げた。

「音楽って、意外と体力使うのよねえ」

「あ、ありがとう」

受け取った缶を、俺は見つめた。

片桐は腕を組み、俺に近づいてきた。

「今日だけだからね。待ってるのは」

「ああ」

俺は缶を開けると、

「いただきます」

一気に飲み干した。

水分がなくなっていたようで、俺は缶の中身を一気に飲み干した。

まだ飲み足りないような俺に微笑むと、片桐はそばに来て、腕を絡めた。

「どこかで、休みましょうか？」

「あ、ああ」

片桐から積極的に腕をとられて、俺は焦ってしまった。

そんな俺がおかしかったのか：片桐はさらに密着すると、

「変なところじゃないからね」

耳元で囁いた。

「な！」

真っ赤になる俺に、舌を出した。

そして、優しく笑いかけると、

「行きましょう」

駅の方へと歩き出した。

「そ、そうだ！駅前に、ケーキの美味しい店があるって」

まだ動揺している俺を、片桐は軽く睨み、

「あたしを太らす気？」

「ち、違うよ」

そんな会話を続けながら、俺達は歩いていった。

いつのまにか…人目を気にしなくなったことに、

互いに気づかずに…。



## 自分より大切な人の為だけに

練習は続いた。

たった一曲の為だけど、美佳を筆頭にバンドメンバーの好意により、練習時間はたっぷり用意してくれた。

初めて合わせてから、1週間が経った頃、俺の歌に変化が表れた。

音と歌声が一体化を持ち：さらに、それらが混ざり合い、一つの塊：つまり、曲になったのだ。

「フウ」

熱気を帯びたスタジオ内で、俺は額から流れる汗を拭った。

演奏は、もう完璧に近い。

あとは、本番で緊張しないことぐらいだ。

「お疲れ様」

ジョリーの練習が終わった俺が、スタジオから出ようとしたら、

ドラムセットの中から美佳が声をかけてきた。

「太一！」

「うん？」

俺は、ドラムセットの中を見た。

何か言いたげに、少し口を開けているのに、美佳は言葉に出せなかった。

「？」

俺が首を傾げると、

美佳は息を吐き、力が抜けたように…微笑んだ。

「本番…頑張ろうな」

「ああ」

俺は頷くと、ドアノブを掴み、スタジオから出た。

ドアが閉まる音を確認した後、美佳は大きくため息をついた。

「美佳…」

心配そうなバンドのメンバーに、美佳は笑いかけると、

「みんな！次の曲いくぞ」

美佳は、スティックでカウントを刻んだ。

仕方なく、メンバーもそれに合わせた。

「あとは…ライブ本番か」

最近、何時に終わるかわからないから、片桐には先に帰るように言っていた。

携帯を持っていれば、連絡できるのだけど…まだ持つ気はないらしい。

だから、俺は…。

自転車乗り場に向かい、自分の自転車を引っ張りだすと、裏口から飛び出した。

急いで自転車をこぐと、俺は片桐の家を目指す。

片桐のアパートの前に自転車を止めると、彼女の部屋をノックした。

「はい」

着替えた片桐がドアを開け、顔を出す。

俺は手短かに、今日の練習の成果を伝えたと、

頭を下げ、自転車へと戻った。

「上がっていく？」

片桐はいつもそう言うが、俺は家の中には入らなかった。

入りたくないことはない。

だけど、まだ正式に付き合っていない俺が、簡単に中に入るのは、駄目だと思っていた。

2人の手順は、おかしいかもしれないけど、

俺はきちんとしたかったのだ。

彼女に見送られながら、自転車に飛び乗る。

帰りは勿論、国道沿いを走るのだが、

あの女の店の前を通っても、振り向くことはなかった。

今、思えば…何だったのだろうか。

無理して合わせていた日々を、懐かしむことも悔やみこともなくな  
った。

ただ…悲しみを知り、傷を負ったから、

俺は片桐に出会えた…今は、そう思えるようになった。

ジョリーを口ずさみながら、俺は自転車のスピードを上げた。

日々が過ぎるのは早い。

特に、幸せな日々は…早いのだろうか。

軽音部のライブの日が来た。

たった一曲…ゲスト参加みたいなものだけど、

俺の緊張はピークだった。

一応、一般のお客も入場フリーであるけど、

高校の視聴覚室まで、見も知らない人が入ってくるとは思えなかった。

「まったく…太一やつ」

ライブが始まる…数分前、美佳が俺に電話をかけていたけど、つながらなかった。

何回かコールしていると、後ろから声をかけられた。

「橘さん！もうすぐ始まります」

視聴覚室のドアが開き、廊下にいる橘に、関係者が声をかけた。

「あっ、はい」

美佳は携帯を切った。

ドラマー不足により、美佳は何組かのバンドを掛け持ちしていた。

「遅れるんじゃないぞ」

美佳は携帯をスティックに持ちかえて、ステージへと向かった。

映画館のように、なだらかに下へと下がっていく階段。

その周りにある机の前には、軽音部の関係者達が早くも座っていた。

美佳は、視聴覚室の一番奥に設置されたドラムセットの中に入った。

見上げなければ、一番後ろの扉は見えない。

スティックを指で回し、叩くことなく、寸止めでタイコの配置を確認する。

問題はない。

あとは、演奏するだけだ。

美佳の神経が、ドラムだけに向けられた時、

後ろのドアが開き、総司と正利が視聴覚室に入ってきた。

もうすぐ最初のバンドの演奏が始まる。

## ギフト

「もう…始まってるかな？」

携帯で時間を確認しようとして、俺は頭を抱えた。

「電池が切れてる…」

土曜日を利用して、学校の許可を取り、一般にも解放されたライブだが、

わざわざ来る人は少ない。

休みの為、学生もほとんどいない。

なのに、俺は緊張していた。

渡り廊下から、誰もいないグラウンドを眺め、

「学校って…誰もいなかったら、学校って感じがしないな」

呟いた。

まあ…校舎内には、いるのだけど。



緊張する癖に、疲れから…生欠伸をしてしまった。

大口を開けた俺の耳に、クスクスと笑い声が聞こえた。

声の方に振り向くと、制服姿の片桐がいた。

「あっ…」

俺は慌てて、口をふさいだ。

「今から本番のボーカリストが、こんなところで…ばおっとしてるなんて…」

片桐は渡り廊下の手摺にもたれると、 頬杖をつき、

「余裕ですな」

笑顔を向けた。

「よ、余裕なんて…ないよ」

俺は、普段と変わらない片桐をじっと見つめた。

俺の視線を感じ、片桐は自分の体を確認した。

「何か…ついてる？」

埃でもついてるのかと、全身をチェックする片桐に、

俺はため息をつき、

「制服…。休みなのに…」

見に来てくれると思っていたけど…

だとしたら、私服だろと期待していた俺の思いは、砕け散った。

「はあ…」

深くため息をつく俺を、片桐は頬杖をやめると指差した。

「神谷くんも、制服じゃない！」

「お、俺は…一応、学校の行事に参加するから」

土曜日に視聴覚室を貸し出すからといって、生徒に私服を許す学校ではなかった。

でも、それはイベント参加者だけであって、休みの生徒には適応されていない。

いないのに…。

私服ではない片桐に、俺はがくつと肩を落とした。

「べ、別に…いいじゃない！」

片桐はなぜか…恥ずかしくなって、両手で制服を隠した。

俺は、そんな片桐な様子を見て、これはこれでいいか…と思ってしまった。

恥じらう片桐も、かわいい。

ひとしきり…かわいい片桐を見つめた後、俺ははっとした。

「もうすぐ…ライブだ」

テンションの下がる俺に、片桐は目を丸くした。

「行きたくない」

ポロツと出た本音に、片桐はため息をつくど、俺に近づき、

「おい！その少年！わざわざ呼んでおいて、それはないんじゃないかな」

少しお姉さんぶった片桐の言い方に、俺は驚き…笑った。

「ごめん、ごめん…そうだよね」

俺は笑いながら、グラウンドの方に顔をやった。

すると、

いきなり頬に柔らかいものを感じた。

「え」

片桐が、俺の頬にキスをしたのだ。

突然のことに固まってしまった俺の耳元で、

片桐が囁くように言った。

「頑張れ」

ゆっくりと俺から離れると、片桐は笑顔を向けたまま、俺に敬礼した。

「少年の健闘を祈る」

と言うと、片桐は手を振りながら、俺に背中を向け、一足お先に視聴覚室に向かった。

片桐の唇が触れた頬に手を当てながら、俺は渡り廊下から離れていく…片桐の後ろ姿をぼおっと見送った。

「いくか！」

しばらくして、はっとした俺はゆっくりと頬から手を離すと、思い切り背伸びをして、歩き出した。

もう緊張はない。

あるのは、片桐に対しての思いだけだ。

あとは…それを歌に乗せるだけ。

君に向けて。

結構足が速いのか…もう視聴覚室についた片桐は、躊躇うことなく、扉を開けた。

音が漏れないように、頑丈な作りになっている扉を閉めると、

ライブハウスと化している音の空間が広がっていた。

ちょうど演奏が終わったところで、バンドの入れ替えが始まった。

次のバンドはドラマーがいる為、美佳はセット内から立ち上がると、何気なくステージから、上を見上げた。

すると、美佳の目に、客席と化した席達のちょうど真ん中に座ろうとする片桐の姿が飛び込んできた。

ステージの前列は関係者で埋まっており、片桐が座った中央が：客が座っている最後列となる。

美佳はスティックを握り締めると、ドラムセット内から飛び出した。

そして、真っ直ぐに階段をかけ上った。

「橘！結構良かったぞ」

最前列に座る正利が、ステージを降り近づいてくる美佳に声をかけたが、

思い詰めたような表情をした美佳には聞こえなかったようだ。

そのまま横を通り過ぎた美佳に、正利は首を傾げながら目で追った。

「なんだ？」

正利の隣に座る総司も、心配そうに目で美佳を追った。

席についた片桐の横に、美佳が立った。

「か、片桐さん…」

何とか絞り出したような声に、片桐は驚き、

「はい？」

美佳の顔を見た。

真剣な表情と、真剣な眼差しが、片桐を射ぬいていた。

片桐は少し…首を傾げた。

美佳はしばらく…片桐を見つめた後、おもむろに口を開いた。

「少し…話があるの」

その頃、渡り廊下を出た俺は視聴覚室に向かっていた。

片桐と美佳が、二人で出たことを俺はまだ知らない。

俺は視聴覚室の扉を開け、中を見た。

俺が参加するバンドの一組前であるメタルバンドが、演奏していた。

耳をつんざく爆音に、一瞬顔をしかめ、観客を確認したけど…片桐

はいない。

「あれ？トイレかな？」

俺は扉を閉めると、控え室となっている隣の空き教室に入った。

「おはようございます」

次の出番の準備をしているバンドのメンバーに挨拶したけど…美佳がいない。

「あれ？」

俺はその時も、二人がいつしよにいるとは考えなかった。

美佳と片桐。

同じクラスではあるけど、彼女達が話すことはないと思っていた。

接点がないからだ。

しかし、そのないはずの接点が…自分であるとは、思ってもみなかった。

青空の下、美佳と片桐は屋上にいた。



美佳に先導され、屋上に足を踏み入れた片桐は、雲一つない晴天に目を奪われた。

先に屋上に入った美佳は、片桐に背を向けて…空ではなく、足下のコンクリートに視線を落としていた。

美佳は一度目をつぶると、顔を上に上げ、

「こんなふうに…片桐さんと話すとは、思わなかった」

瞳に映る青空も、美佳の頭には映らない。

振り向き、美佳は片桐と対峙する形になった。

「本当は…じっくりと時間をかけて…話したかったけど…」

美佳は、片桐を見据えた。

「…」

何を言われるか…わからなかった片桐だけど、薄々感じていた。

だから、素直についてきた。

美佳から、視線をそらすことなく、彼女から向けられたものは、すべて受け止めるつもりだった。

美佳は一度、深呼吸した後、おもむろに言葉を吐き出した。

「太一のことをどう思ってるんですか？」

「太一？神谷くんのこと…」

片桐はそれ以上、何も言えなかった。

そんな片桐を睨みつけ、

「お、おれは！あいつをまた…不幸にするやつがいたら…絶対、許さないからな！」

口調は強いけど、涙でぐちゃぐちゃになった美佳の顔に、片桐は言葉を飲み込むしかなかった。

「それだけは…憶えている！」

美佳はそれ以上…何も言えなくなった。

止まらない涙が、悔しかった。

片桐に、涙なんて見せるつもりはなかったのに…。

美佳は涙を拭いながら、片桐の前から駆け出した。

立ち尽くす片桐の横を通り、ドアを開けて、階段をかけ下りた。

そして、一番近くのトイレに飛び込むと、美佳は泣いた。

土曜日の為、誰もいないのが幸いした。

声を出して、泣く美佳に気づく者は…誰もいなかった。

次のステージが始まるまで、涙はすべて流さなくてはならない。

そうしないと、太一の後ろで叩けない。

彼は自分ではなく、前に向かって歌うのだから。

「そっか…」

片桐は…振り返ることもなく、

しばらく美佳が立っていたところを見つめていた。

彼女の言いたいことは、わかった。

どんなに、彼のことが好きなのかも。

それなのに…美佳には、悪いと思う気持ちが湧かなかった。

彼女の気持ちは痛いくらい、理解はした。

だけど、譲る気はなかった。

「そうなんだ…」

片桐は自分の胸を抱き締めて、目をつぶった。

自分では気付かないように、そうならないようにしていたのに、

美佳の告白で…逆に気付かされた。

「そっか…」

片桐は振り向くと、屋上の扉に向かって歩き出した。

不思議と…嫌とか、嫌悪感はなかった。

そんな気持ちを持ってしまった自分自身に対しても。

そのことに一番…驚いていた。

そうなんだよ

「どこいったんだよ」

控え室のドアを音を立てて開き、飛び込んで来た美佳に、俺が声をかけた。

もう俺のスタンバイは、出来ていた。

だけど、俺の出番は一番最後…このライブイベントのラスト曲でもあった。

美佳は俺の姿を認めると、ギロリと睨み、

「おれは、外の空気を吸いに行ってたただけだ！お前こそ、来るのが遅いんだよ！」

「な」

どこか機嫌の悪い美佳にたじろぎながら、

「い、一番…最後だから、いいだろう」

そんな言葉を口にした俺に、美佳はスティックで指差すと、

「そんな考えが、甘い！甘過ぎる！バンドを舐めるな！」

「い、いい…」

あまりの迫力と正論に、俺はすぐに言い返せなかった。

そんなやり取りをしている間に、前のバンドの出番が終わり、

美佳達の番になった。

「いくよ！」

スティックを握り締め、美佳は控え室から視聴覚室に向かう。

その後ろをギターや、ベースを抱えたメンバーが続く。

俺の出番は、まだだ。

扉が開き、1人残された俺は…ため息をついた。

「なんなんだよ…。まったく…」

前のメンバーとの入れ替え途中、シンバルの位置などを叩きやすいように調整していた美佳の目に、

観客席に座った片桐の姿が映った。

先ほどよりかなり、前に座っていた。

「フン」

美佳は、軽く鼻を鳴らした。

「え！」

自分達より前に座った片桐を見て、総司はすっとんきょうな声を出した。

前に座ったことより、片桐がわざわざライブに来ていることに驚いていた。

「始まるぞ」

総司の隣に座る正利が、総司の肩を叩くと、ステージに集中するよう促した。

「あっ…うん」

総司は頷くと、ステージに視線を向けた。

正利は頬杖をつきながら、一瞬だけ片桐を見たが、何も言わなかった。

「1、2、3、4！」

美佳がスティックでカウントすると、演奏が始まった。

それは、俺の出番までのカウントダウンでもあった。

「ふう〜」

大きく息を吐き出すと、俺はお腹に手を当てた。

腹式呼吸はできている。

喉だけの発声ならば、演奏に勝てない。

俺の声を客席にいる片桐に、届けなければならない。

悲しみを…幸せに変える歌を。

バンドの演奏は、ほぼ時間通り進行している。

俺は控え室を出て、ステージ横の扉の前に立った。

こちらからは、関係者以外入れませんと書かれている張り紙を見つめ、



少しだけ扉を開けた。

美佳のドラムが、俺の出番の前の曲のエンドロールを叩いていた。

「いくか」

一気に扉を開けると、俺はステージを目指した。

観客席は見ない。

まずは、ステージに立つこと。

その前に、キョロキョロしたらみつともない。

美佳のドラムが終わると同時に、ステージに立った。

俺の為に、開けてくれたマイクスタンドの前に立つと同時に、キーボードがメロディを奏でた。

俺の紹介もない。

ドラムやすべての楽器の音が、美しく混ざり合う。

「あっ」

イントロを聴いただけで、反応する生徒もいた。

そういやあ、毎日かけてたしな。

知ってるやつもいるか。

長いイントロと、繰り返すコーラスをバックに、

俺の目は観客席の片桐を探し出した。

さあ…歌よ。

君に届け。

俺はマイクスタンドに、口を近づけた。

歌詞を歌いきるよりも、気持ちを伝える為に…ジョリーを歌い始めた。

それから・・・そして

バックで叩きながら、美佳は涙していた。

俺の歌は…明らかに練習より上手かった。

その理由は、簡単だった。

その歌を聴かせたい人物がいるからだ。

温かく…素直な歌声は、さっきまでのバンド達にもなかったものだった。

目立つ為や、楽しみたい、聴かせたいではない。

聴いてほしい。

そこは、押し付けがましい気持ちはなかった。

（本当に…好きなんだ）

美佳はミュージシャンとして、ドラムは叩き続けたけど、橘美佳としては…目をそらしていた。

我慢できない。

一曲でよかった。

それ以上は叩けなかった。

絶対に。

天へと昇天するような温かい光を感じながら、演奏は終わった。

俺は思わず、天井を見た。

何かが天へ浄化されたように感じた。

温かい拍手が、視聴覚室を包んだ。

そんな中、ドラムセットの中で、1人…嗚咽する美佳に近づき、

俺は言った。

「ありがとう」

だけど…顔を伏せ、泣く美佳はこたえなかった。

「美佳…」

スタンディングオペレーションとなった視聴覚室は、拍手が鳴り止まない。

俺はもう一度、ステージの前に行き、頭を下げた。

「片桐！」

ライブが終わり、生徒達が帰る中、俺は片桐を探した。

アンコールは、美佳が叩ける状況ではなくなったので、演奏されなかった。

「神谷くん」

外の廊下に、片桐はいた。

「片桐！」

俺は片桐に駆け寄った。

「よかったわよ」

片桐は微笑みかけ、

「確かに、幸せになれる歌だったわ」

「ありがとう」

片桐からの言葉が一番、嬉しかった。

俺も笑顔になり、

「もう少し待ってて、一緒に帰ろう」

「それは、駄目よ」

「え」

予想外の片桐の返事に、俺の思考は止まった。

片桐は、俺から視線を外すと、

「橘さん・・・泣いてたね」

少し深呼吸し、

「今回のライブは、橘さんがいたから．．．歌えたんでしょ？」

俺に顔を向け、目を見つめた。

「．．．」

その瞳の強さに、俺は息を飲んだ。

「行ってあげて」

「片桐」

「ちゃんとお礼をいわないと」

俺は、いつもと違う片桐の瞳の色に魅了され．．．断ることができなかった。

「わかった」

頷いた俺は、片桐に背を向けて、走り出した。

「馬鹿ね．．」

俺の背中を見送りながら、片桐は自分に向けて呟いた。

今日だけよ．．．と言いたかったのに。

いえ・・・

本当は、行かしたくなかった。

視聴覚室に背を向けて、歩き出す片桐の頬に涙が流れた。

その涙を指で拭い、確認した片桐は・・・笑った。

「ほんと・・・馬鹿・・・」

後悔しながらも、片桐は嬉しかった。

まだ・・・涙を流せる自分に。

「美佳！」

力強く開けた控え室のドアの向こうに、美佳はいなかった。

気分が悪いと先に、帰ったらしい。

俺はバックをつとめてくれたメンバーに、ありがとうございますと頭を下げると、

控え室を出て、美佳の後を追った。



多分、自転車置き場だ。

特別校舎をでて、真っ直ぐに向うとした俺は慌てて、足を止めた。

なぜなら…目の前に美佳がいたからだ。

腕を組み、校舎を出入口の前で立つ美佳は、真っ直ぐに俺を見つめ、

「かけてたんだ…。太一が、ここに来るか…来ないか。もう後、10分待って来なかったら、おれは帰ってた。そして」

ゆっくりと近付いて来た。

「もう…あきらめるって」

「え」

何のことかわからない俺の反応に、美佳は顔をそらし、

「片桐さんが…来てたよね」

「ああ…」

話題が変わった。

美佳は唇を噛み締めると、顔を上げた。

「あの曲も片桐さんの為だったんだ」

美佳の瞳が、涙で揺れていた。

ああ…そうか。

俺は心の中で、頷いていた。

この時が来たんだと。

俺は…卑怯だった。

あの人と別れた時、美佳に優しさを求めたのだ。

それは、無意識だったけど、残酷だった。

いつも、いつも…美佳には、残酷だったのだ。

なぜなら…俺は、美佳を一番には愛せないから。

それなのに。

「だとしても、おれは！太一のことを！」

さらに近付き、すがりつこうとする美佳を、俺はよけた。

「ごめん…。俺は、片桐が一番好きなんだ」

よけながら、何とか口にした言葉から、美佳は逃げるように走り出した。

だけど、追うことなんてできない。

「本当に…ごめん」

呟くように言った俺の前に、総司がいた。

総司は俺を睨んだ後、何も言わずに走り出した。

美佳が消えた方に。

「そうか…」

俺は改めて、総司の美佳への思いの深さを知った。

そして、それを邪魔していたのは、俺だということも。

「頑張れ…」

俺は総司の後ろ姿に、眩いた。

そして、大きく深呼吸した後、俺も走り出した。

たまらなく会いたい人の許へ。

「太一の馬鹿！」

涙を流し流しながら、走り疲れた美佳に総司が駆け寄った。

「橘！」

総司の声に、振り返った美佳は残念そうな顔を見ると、歩き出した。

戸惑いながらも総司が、一生懸命何か話しかけているが、美佳は無視した。

それでも、側から離れない総司は、美佳の少し後ろを歩き出した。

そんな美佳達を、道の外れから姿を現した正利が見送っていた。

「まあ、大丈夫だろ」

頭をかきながら、美佳達から視線を外すと、今度は俺が消えた方をしばし見つめた後、一人正門に向かって歩き出した。

## 君だけを

「は、は、は」

俺は、全力で走った。

片桐のもとへ。

思った通り、駅ではなく．．．裏口から帰っていた。

いつもは凜として、後ろ姿からも気品が漂うのに、

遠くから確認できた今日の片桐は元気がなく見えた。

「片桐！」

走りながら、大声で叫んだ。

片桐の体が、ビクとなり．．．ゆっくりとこちらに振り向いた。

俺の姿を確認すると、大きく目が見開いた。

「片桐！」

俺は片桐に飛び込むように、抱きついた。

「片桐．．．」

ぎゅっと抱き締めた。

「か、神谷くん．．．」

片桐は慌て、

「どうして．．．」

俺を押し退けようとするけど、俺は離れない。

「た、橘さんは、どうしたの？」

「もう終わったよ。それに．．．あいつなら大丈夫」

俺は、片桐の髪の毛に顔を埋めた。

「大丈夫さ」

片桐の匂いを嗅ぐと、安心する。

俺は、片桐をさらに抱き締めると、

「俺は、歌だけじゃなく．．．すべてに対して、片桐だけを幸せにしたい」

「え」

唐突な俺の言葉に、抵抗していた片桐の動きが止まる。

「どんなに悲しいことがあっても．．．最後は幸せに変えたい」

俺は片桐の肩を掴むと、ゆっくりと離し．．．目を見つめた。

「片桐となら．．．それができる気がする」

俺はじっと片桐の瞳を見つめた。

（あ．．．）

俺は気付いた。

その瞳の奥にあった影がなくなっていることに．．．。

ただ．．．綺麗で、透き通った宝石のような瞳が、あるだけだった。

涙で、濡れているけど．．．。

「愛してる」

思わず．．．口から出た。

突然の言葉に、片桐は驚き、

「馬鹿」

と言った。

俺は、堪らず．．．片桐の唇を塞いだ。



無理矢理で、少し乱暴なキスだった。

だけど・・・思いに溢れていた。

俺は、唇を離すと、

「本当に、愛してる」

すべてが止まらなくなった。

「馬鹿ね」

片桐は笑い、

「うそだなんて、言っていないでしょ」

今度は片桐から、キスをした。

長い長い・・・キス。

二人の時は止まったかのように、二人は互いを抱き締め合った。

「ねえ」

二人で、手をつないで帰る途中、

片桐は足を止めた。

「あたし…。携帯、持とうと思うの。駄目かな？」

俺を見上げる…。愛しい瞳に、俺は微笑み、

「いいと思うよ！俺は嬉しいし」

「そっか」

片桐は少し考え込んだ。

悩んでいるように見える片桐の心を後押しする為に、俺は思わず、大胆な言葉を口にした。

「も、持ってくれた方が、あ、会えない時でも…ま、麻衣の声が聞けるしさ」

俺が口にした…麻衣という言葉に、目を丸くする片桐。

照れてしまう俺の横顔を見つめた後、片桐は前を向くと、少し俯き…微笑んだ。

その笑顔の優しさを、照れてしまった俺は…見逃してしまった。

「だけど…ま、麻衣。どうして…いきなり…」

まだ名前を呼ぶことに慣れない俺が理由をきこうとすると、麻衣はじつと軽く睨むように見ていた。

「え?。」

その視線に戸惑ってしまう俺の耳元に、真っ赤な顔を近づけると、

「馬鹿」

呟くように言った。

「え? え? え?。」

それでも、訳がわからない俺から、麻衣は手を離すと、

「太一の鈍感…」

小声で聞こえないように呟いた後、フンと前を向き、俺に告げた。

「でも、持つのは、来月からよ」

「え!。」

俺は少しパニックのまま、

「まだ…二週間もある」

「それくらい我慢しなさい」

麻衣は俺を追い抜くと、

「あたしだって…。我慢するんだから」

また小声で言った。

「二週間か…」

これで、やっと会えない時も声が聞けると思ったのに。

残念そうに肩を落とす俺に、麻衣は振り向くと、

「でも、携帯持ったら…しつこく電話するかもしれないよ」

少し意地悪そうに言った。

だけど、俺は平気な顔をして、

「大丈夫」

と微笑んだ。

そして…

俺は麻衣に手を伸ばし、彼女の腕を掴んだ。

「え」

突然強引に掴まれて、よろける麻衣をしっかりと抱き締めた。

「もう離さない．．．」

「神谷くん．．．。でも、あたしは．．．」

「俺は、お前じゃなくちゃ駄目なんだ。例え、どんな障害があろうと．．．お前以外は考えられない」

「神谷くん．．．」

「俺がずっと．．．すべての悲しみから守ってやる」

俺の心からの言葉に、麻衣はまた涙した。

「ありがとう」

そう言って、俺の胸に顔を埋めた。

「片桐．．．」

俺の呼びかけに、麻衣は顔を上げた。

俺は、麻衣の瞳の中を覗き込み、

「綺麗だ」

透き通るような色に優しく微笑んだ。

「あ、ありがとう」

麻衣は顔を真っ赤にして、俺をぼおつと見つめた。

もう彼女に影はない。

二人は自然に、またキスをした。

これからの幸せと．．．永遠の誓いを交わすように。

もう二人を曇らす影はない。

例え．．．どんな悲しみが訪れても、

二人なら最後は、幸せに変えてみせる。

絶対に。

End.

## 君だけを（後書き）

初の純粋な恋愛物となりました。

何も考えず、ただ気持ちの赴くままに書きました。

ただ大切に、愛していく…そんな決意のある物語を書きたかった…  
それだけです。

美佳に関しては、書ききれていないですけど、

今回は麻衣と太一の物語ということで…。

これを気にいった方は、是非…『恋しくて』という映画を見て下さい。

美佳をドラマーにしたのは、そのオマージュです。

映画は三角関係ですけど、素敵に終わります。

本作品とは全然違いますけど（映画はさわやかで、純愛）、  
恋愛映画では一番好きです。

では、皆さん！

ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0056j/>

---

心の裏側と素肌の境界線を越える為に

2010年10月13日15時29分発行